



青海豚の攻防

ハルカ・ヘルカ

鳥居 大誠

ハルカ・ヘルカ2

鳥居大誠



目次

第〇話	前作のあらすじ	1
第一話	ハルカ・ナノカ	4
第二話	ハルカ・カクホ	23
第三話	ナニトテ・カミノケ	45
第四話	サクセン・バクゼン	58
第五話	カホ・カクホ	73
第六話	トウソウ・シソウ	87
第七話	ディー・ディー	100
第八話	アオイ・イルカ	114
第九話	キミカ・ボクカ	127
人間との付き合い方を見つけるための、あとがき		138

※この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは一切関係ありません。また本作に登場する医学の情報は必ずしも正確なものではありません。知れない事を作者の想像で写している箇所や、著者の勉強不足により誤って表現されている個所が多く含まれています。

第〇話 前作のあらすじ

『死んでも生き返る、そして自分という生命体が一体増殖する』そんな力をもつ人間は分裂人間と呼ばれ、社会的超少数派の生き物として世界の各地に無自覚ながら点在している。増殖前の記憶を引き継げる点や体力を干渉し合える点、死因となった傷を修復できる点などからも、この能力は軍事科学技術の発展をもたらす可能性があり、極めて危険な情報として世間にはまだ公開されていない。日本国内ではその力を巡って二つの勢力が対峙している。

防衛省直轄組織、川越正満率いる『青海豚』と、西京学院大学医学部生物学応用生命学科特殊遺伝子専攻、通称『西学』である。日本政府は防衛省所属青海豚のさしがねで、西京学院大学医学部に対して研究費の打ち切りを決定、また、現在の西学の院長兼教授である對馬貫太を学術委員会の会員候補から外すなど政治的圧力をかけ、組織としては優勢にある。しかし、青海豚は医学の専門知識を所有していないため、他国の組織や医学部組織に一步遅れを取っている。

この二つの組織に挟まれたのが榊田遥香、当時二十二歳。彼女は日本で偶然発見された分裂人間で、無知

であったが故に数人のハルカを自ら生み出してしまった。遥香たちはこの問題をなんとか解決しようと、ネットで偶然知りえた情報を宛てにし、川越という男の元に分裂体のハルカが会いに行つた。この川越こそ、青海豚の川越正満である。一方、ほぼ同じタイミングで遥香の家には長崎由依ながさき ゆいという女学生が尋ねてきた。彼女は遥香の中学陸上部時代の親友で、今は西学の研究チームの一員である。幸運な事に由依はこの分裂現象のエキスパートであり、遥香は様々な情報を聞き出すことができた。加えて由依は、青海豚が中国政府と裏で結託しており危険だと遥香に吹き込む。彼女たちは分裂体のハルカの回収を諦めて由依の研究室を訪れると、そこでは對馬教授とその助手の名取理乃なとり のりが出迎えてくれたのだが、すぐさま部屋に鍵をかけられ監禁されてしまう。

本体はその場で裏切られたことを自覚し、自殺を決行。分裂人間の特徴を活かして遥香は、十数秒後に監禁された部屋で再び息を吹き返し、また新たな分裂体を彼女の家に誕生させた。ガードの硬い研究室に忍び込んで本体を奪還することは不可能だと悟つたその分裂体は、全ハルカを代表して悠々と生きることを選択した。しかし、西学に入院していた姉の冬華の存在を思い出す。妹が分裂体であることが原因で姉に危害が加わる可能性を恐れ、彼女は病院から姉だけを連れ去り、盗んだバイクで高速道路を走つた。

西学の情報網は侮ることなどできなかった。西学の病棟から冬華が抜けだしたことを聞きつけた對馬教授は、救急車を使つて冬華を取り戻すよう長崎由依と名取理乃に指示を出す。またドクターヘリまで手配させ、一方通行の高速道路上で地獄の鬼ごっこが始まる。

冬華たちは車を乗り継ぎ追手から逃げる途中、「そもそも二十二年生きてきた榊田遥香は姉（冬華）の分裂体である」と姉から伝えられた。幼少期に交通事故にあい、その衝撃で誕生したと言う。さらには自分の母も、母方の祖父も分裂人間だったと知らされる。冬華と名乗つて二十年近く生きてきた姉は榊田遥香として生きることを肯定的に強く決意すると、その瞬間、分裂体がすべて消滅した。

しかし、車のハンドルを握つていた分裂体のハルカすらも消失させてしまったため、遥香（姉の冬華を演じていた眞の本体遥香）は高速道路上で大事故を起こしてしまう。その事故の混乱に乗じて遥香を連れ去った人物がいた。青海豚の川越正満である。遥香はこれまでの全ハルカが犯した罪を償うためにと独居房に入れられ、長く独りの夜を過ごした。今から始まる物語はそれから七年六カ月後の話である。

第一話 ハルカ・ナノカ

「榊田遥香さん。お疲れ様です。どうです？ 出獄した気分は」

何をしたら良いかが分からない。何を話せば良いかが分からない。何か間違えたことを言っただけじゃないよな、そんな気分。本当にどこにでも行って良いのだろうか。

「感じる事が多くて、一言では言い表せません。気になることを口にしていいのであれば聞きますが、なぜ、三年早いのでしょうか。私はまだ刑期を終えていないはずですよ。裁判にもかけられていませんし、そもそも刑期は決まっていたのでしょうか。どうなっているんです？」

「それは、まあ置いておきましょうよ」

聞かない方が良いことは聞かない、そんな世界で生きてきた彼は、隠し事の仕方を知らないようであつた。

「あなた方の望むことは何でも出来てしまうんですね。私はこのあとどうなるのでしょうか」

見たこともない建物の日の当たらない通路をスタスタと歩いて行ってしまふ彼に、私はついていくことしかできなくて、その顔を覗き込むと一言、どうしたいかと聞かれてしまう。

「どうすればいいか分かりません」

少しばかり苛立つて、大げさな溜息をついた。

「じゃあ、あれに乗って」

そう言って男が顎で指したのはわざとらしい軍用車両だった。

「何ですか、これ」

「三トンハンっていうトラックです。三元豚じゃないですよ」

「そうじゃなくて、なんでこんな所に……」

「ああ、陸上自衛隊から借りていたんですよ。別にパクったわけじゃないですよ。今日ついでに返そうと思って」

「だから、そういうことじゃなくて」

私が聞きたかったのは、あなたが何者かということである。少し車両に近づくと、運転席と助手席には既に男性が二人座っている。

「あの、誰か二人も乗ってるんですけど」

「この車は二十二人乗りなので安心してください」

そう言って男はトラックの荷台に乗るための梯子に足をかけて、私に向かって手を伸ばしてきた。

「お嬢様、どうぞ」

王子様に言われれば嬉しいような一言も、軍用車両を目の前に聞くと、そのセリフの魅力さもあり幻滅する。中に入ると車は動き出し、海の家に設置されているような簡易式の椅子で男と対面して座ることになった。

「ドナドナ・ドーナー・ドーナー……」

今の私には歌いだす彼を突っ込める余裕はなかった。

「あの一。私はどうなるんですか。どうすればいいんですか」

男はゆっくりと首を掻き、大きく息を吸った。とうとう話が始まる時が来たのだ。私はさわさわと乾いた両手を揉み合わせた。

「好きにするといいいんじゃないですか。釈放、それは自由を意味する。せつかく与えられた人生なのに、なぜ君は自由を人に委ねるんだろうって思っちゃうね。君はさっきあの場で車に乗らない選択もあった。シャバの空気にまだ慣れないのかな」

「そう言われましても」

「そう言われましても？」

「ズルいです。あの場で私が逃げられないことは分かっていたはずです。私には何もない。西学病院には戻れ

ないし、家も服も、金も仕事も。何もない」

「まあ、そうですね」

「この七年間に何があつたのかも知らないし、前科があれば仕事は見つからない。時期に死ぬのは目に見えています。でも私が人知れずどこか知らないところで息絶えることはあなたたちが許さないはずです」

この声は運転席まで聞こえているかもしれない。それくらい冷静さを失つた話し方をしてしまった。

「なぜ君はそう思うんだい？」

「私が貴重なサンプルだということは自覚しています。独居房にいた時も健康診断だっていつて何度も何度も血を抜かれましたけど、私もそこまで馬鹿じゃありません。何か分かったことでもあるんですか？」

小さな声と慎重な目つきで内緒話を促してみたが、彼の返事は本当に残念で雑なものだった。

「それはまだお伝え出来ません。でも、あるといったら、どうするんです？」

結局何も教えてはくれない。

「従いましょう。あなた方が望む結果があるのであれば、社会的弱者の私は従うまでです。私をどうするおつもりですか」

すると男はトラックの椅子を一列使つて寝そべり始めた。これ以上会話を続けることがないという合図なのだ

ろうか。足を組んで帽子を顔に乗せると、手を枕にするように頭の後ろで組み、目を合わせないまま会話をつづけてきた。

「そんな中途半端な覚悟で他人に人生を預けると、その後どうなるか保証できませんよ」

「結構です」

どういう話にしてもこの先の未来は変わらない気がしていた。だから私は即答できたのだが、男は片手で帽子をどかし。私の方を見てこう呟いてきた。

「じゃあ君を、僕のお嫁さんおよめちゃんにしちやいますね」

ついていけない状況も続き、視線がどうしても彷徨ってしまう。ガタつく椅子が気まずさをより引き立てる。

「黙っちゃだめよ。なんか俺が悪いこと言っただけじゃない。自分は何者なのか、自分は何をしたいのか、自分は何をしなければいけないのか、自分には何ができるのか。それを考える時間は七年間十分にあつたはず。

当然、ここに出てくる日のことも考えられる時間はあつたはず。君は賢い。目的地に到着するまで待ちましよう。もう一度自分の人生を考えてくださいよ」

そう言われて車が止まったのは一時間程度経った頃であつた。それまで男は目覚めることなく、私は車の中で一人自分の空虚な人生を振り返っていた。車の到着と同時に目を覚ました男は荷台の後ろから飛び降

り、クールでスタイリッシュな男のドライバーと会話をしていた。

「ゾラ、送迎ありがとう」

「いえ。彼女とは何か話したの？」

「いやガッツリ寝てた」

「それドライバーに言うかよ」

「すまんすまん。彼女をこれより案内する」

「了解」

そううつすらと話の内容が聞こえて、私は車から降りる準備をした。

「おまたせ、お嬢さん」

全くもって待ってなんかないのだが、それを理解したうえで敢えて言ってきたのだろうと、私もだんだんと気づけるようになってきた。仲良くなりたいのだろうか。この手の男には出会ったことがなかったのだ、私もまだ彼の全てを信じることができずにいた。

「ささ、とりあえず中に入ってください。適当にお茶でも出しますんで。それで、さっきの話、答えは出ましたか」

早く本題に入りたいのか、一息つく間もなく質問を繰り返してくる。私も答えない理由はないので、その場で答えることにした。自然と歩くペースがゆっくりになる。

「じゃあ、聞かせてもらいましょう」

「ええ。私は誰にも邪魔をされずに生きてみたい。人の目なんかを気にせずにくつすり眠りたいし、おいしいものをお腹一杯になるまで食べたい。贅沢品じゃなくていい。私は二十年間病院の中、七年間刑務所かなんかの中に入れられていたんです。まずは人間らしい生活を送ってみたいんです。その中で、私としての生き方を見つけてみたいんです。それに尽きます」

「そうですか」

聞いてきた割に、彼の返事はあっさりとしていた。

「ただ」

「ただ？」

「ただ、私には生きる当てがない。ネット上では私の名前が汚れた形で出回っているでしょう。高速道路上でめっちゃめっちゃなことをしたんですし。『高速道路で危険なこととしていたやつが数年後にはのびのびと生活しているなんて信じられない』とかなんとか、言われていることでしょう。社会になんて立てそうにな

い。母子家庭とはいえ給付金も支給されないし、今ここから解放されても私には家がない」

「そうですね」

「あなた、たしか川越さんって名乗っていましたよね」

「あら、覚えていてくれていたなんて。ひよっとして僕ちゃんに気があるのかしら？」

私はついに彼のセンスのないセクハラ冗談をスルーする力を身に着けた。

「七年前、川越さんはこんなことを言っていました。『信じてくれたら国として君を守ってあげよう。証人保護プログラムがなくても保護すればいい』と。冗談でこんなことを言うとも思えませんし、何より身柄引き渡し人があなたであること、十年牢屋に入っていると言われたのにもかかわらず刑期が七年で終わっていること、この辺りを見ると私のことも救いようがないわけではないと感じます。もちろんタダでそのサービスを享受できるとは思っていません。私が持っている情報は全てご提供します。これで手打ちにしませんか」

私にはこれ以上の良い案が思いつかなかったのだが、今私が考えられるベストなアイデアである自分でも納得している。話を聞いていた川越さんも話の途中で嫌な顔一つ見せなかった。

「なるほど。ままま、いいでしょう」

口を尖らせてゆつくりと拍手する彼は、少し上から目線な感じもした。

「一つだけ聞いても良いかな？」

「何でしょう。一つ、とは」

「なぜ考える時間を作ったと思いますか？」

本題には関係のない質問であった。自分の思いを語り切った今、私はここで何を発言しても許されるのだと感じ、気分は少しばかり楽になっていた。がっちり組んでいた手が緩んでいたことで自分の心の変化に気づけたのだ。人と人との最初というのは、何を思われるか分からないから怖い。強気に出れば敵だと思われ、下手なことを言えば馬鹿だと思われる。だから人間というのは初対面において素の自分を發揮できない。川越さんが妙にふざけてばかりいたのも、素の自分を覆うためのペルソナだったのかもしれない。

「恐らくですが、川越さんたちにも同じような考えがあったはずですよ。いや、本当は私を支配下に入れるという結果に導きたかった。しかし、それをそちらから提案した場合、弱い立場を利用して取り決めに強引に進めたことになる。双方一人間として対等な状態からの着手として、それなりの覚悟を決めさせるため、とかでしょうか」

「ほう。よく分かっていらっしやる」

「何十年も自分や社会と向き合っているんです。考えることは得意ですから」

私は自分の素がどこにあるかは分からない。それは長らく人と接していないからかもしれない。そんな私の回答に川越さんは点数を付けた。

「ですが三十点です」

「三十点？」

予想以上に低い点数に私は動揺した。自分の中の何かを否定されているような気分になったのだ。

「たしかにあなたの覚悟も必要ですが、私はあなたの未来のために時間を作りました。アメリカの発達心理学者のがりがりガリクソンってご存じです？」

「いえ、全く」

「失礼、これはジェネレーションギャップだったかな。あのお、ふざけずに話すとね、エリック・エリックソンって名前の心理学者がいるんですよ。まあ名前なんてどうでもいいんですけどね、彼は人間のアイデンティティの形成に独自性と一貫性と所属性が必要だと言ったんです。ただ君の生き方には一貫性がない。その事実は今後、君をますます不安にさせると思う。君自身が君という存在を今から作っていくことがどれだけ大切か、それにいつか気づくといいなと、そう思うんです。君から未来の方向を見ないことには、未来

の君はアイデンティティを確立できない。だから未来を考えてほしかったんです」

彼は体を急に強張らせて、真剣な目つきで私に語り掛けてきた。まだ彼とは一時間も接していないけれど、どこか彼の生き方に基づいた、言わば『素の川越さん』が見れた気がした。

「ありがとうございます」

「さて、いずれにせよ君には青海豚に入団してもらいたい。もう後には戻れなくなりますが、良いですか？」

「ええ」

「青海豚の説明もしていないのに、度胸があるんですね」

「そうするしか生きる道はないので」

これ以降の川越さんとの会話は惰性で成り立っていたようにも感じる。

「ご理解ありがとうございます。青海豚については後程ご説明いたします。それと、後出し情報で大変申し訳ないんですが、うちにはおいしい食べ物はありません。残念な美味しさのレーションくらいしかありません。それと朝は起床ラッパが鳴りますので快眠は保証できません。まあいずれ慣れますよ」

「そうでしたか。その、レーションっていうのは？」

「コンバットレーション、配給の余りの携帯用食料です。まあ、まずくはないですよ。クラッカーとかピ

ーナッツとか、偶にはデザートも付きます。こういうの、女性の皆さん好きでしょう？ 贅沢品じゃないですけど、おかわりもできますので。僕のピーナッツもよろしければ……」

「おーい、それ以上いくとセクハラになっちゃいますよ」

「おっと、それは失礼」

一方的に話し続ける川越さんの話を遮って部屋に入ってきたのは、ベストを着こなした、かなり顔の整った男性であった。

「お、これは田中准空尉。今日もベストなベスト姿ですな」

「正満、今日も盛大にスベってるよ」

「大丈夫、俺二回大学スベってるから」

「何が大丈夫だよ。てかそれ初対面の時からずっと聞かされてた身にもなってくれよ」

「わりいわりい、俺の鉄板ネタだから」

とてつもなくくだらない川越さんのギャグも、田中と呼ばれる男性の突っ込みが入るだけで、なかなか面白い漫才になる。川越さんも田中さんを前にすると、さっき私と話していた時とは全然違う一面を見せていた。川越さんの口元がニヤついていて、田中さんとの仲の良さが伺える。

「今日はみんなここにいるのかな？」

「ええ。呼びかければすぐに集まりますよ」

「そうか。よし、それでは一緒に動くメンバーを紹介しましょう。待ちに待った自己紹介タイムってやつですな。全員集まって」

彼がそう言うのと部屋の奥からぞろぞろと五人の男性が現れて、集合の合図から十秒も経たないうちに私を交えた円陣が出来ていた。集まった人の中にはさっきの車を運転していた人もいた。

「それでは紹介しよう。左から順に、まずは田中亮輔准空尉、うちの総務員です」

ワックスとアイロンでしっかりと髪型をまとめた田中さんは、少しかしこまったこの雰囲気にも照れた表情を見せていた。

「あつ、よろしく願います」

かっこかわいいとはまさに彼のことで、その横に並んでいる同い年くらいの男性はどちらかというと可愛い男性であった。

「そして川村元彦空曹長。役割は調査員、愛称は『もっち』とか『もっちっち』。気軽にそう呼んであげてください」

「おおお、初対面の子にそれを言うなて」

目を細めて笑った川村さんはやはり、かわいい男性だった。

さとうしゅん

「ごめんごめん。そして佐藤駿一等空曹。あだ名はサトシユン。彼は飛行管理員です。まずは自分の身の回りのことから管理してほしいですが」

「うるさいなーもー。余計なこと言わなくていいじゃん」

川越さんのお笑い要素にも徐々に慣れてきて、それを面白く感じるようになっていた。私がうつかり声を出して笑ってしまうと、佐藤さんは名誉挽回しようと必死だった。

「しゅ、趣味はカフェ巡りでーす、あとはあとはドライブとかスキーとか結構好きです。あとは」

なかしまあおぞら

「はいはい、ちよつと黙ってもらって。そして中島青空一等空曹。事後処理員です。あだ名はゾラ」

「よろしくね」

事後処理員というのは聞き慣れない役職で、少し詳細を聞きたいところではあったが、次に並んでいた人の顔を見た瞬間、そちらの紹介に釘付けとなっていました。

「そして最後に、川越二郎空士長。医療解析員で、僕の弟です」

「よろしく」

彼からはあまり覇気を感じられなかった。川越正満さんは川越二郎さんのことを弟と紹介していたが、私にはその秘密が分かる。髪型は違えど、顔のパーツや背丈はほとんど同じなのである。間違いない、彼は正満さんの分裂体であるが、私は取えて突っ込みはしなかった。それこそ、暗黙の了解なのだろう。弟と紹介があった時の隊員の表情を見たとき、私はその秘密を口にしてはいけないと悟ったのだ。

「そしてね。本当はもう一人メンバーがいたんだけど、今はここにはいなくてね。ここではこの男子六人で活動しているよ。そして新入りの、二等兵、自己紹介をどうぞ」

「よ、よろしくお願いします。榊田遥香です。あの、二等兵って？」

「つまり初年兵ってことよ。うちのチームに所属するにはそれなりの役職が必要になるからな。あとで正式に書類にサインしてもらうね」

特に組織についての説明を受けることはできなかったのだが、なんだかアットホームなサークルに入会したような、そんな気持ちになった。

「では早速ですが、榊田遥香さん」

「はっ」

「今日からこの名前で過ごしてもらいます。もっちっち、持ってきて」

階級や立場に差はあれど、ため口あだ名で仲良さそうに話している隊員たちの姿を見ると、すごく不思議な空間に身を置くことになったなと感じる。私はどんなあだ名を付けられるのだろうとそわそわしている、もつつちこと川村さんは部屋の奥からとんでもない物を持ってきた。

「これが今日から使ってもらう身分証と印鑑です」

そう言われて私は川村さんからパスポートと印鑑を受け取った。

「本当は君、めっちゃめっちゃ可愛いからさ、川越っていう苗字にしたかったんですけどね」

その印鑑には反転した文字で『松浦』と書いてあって、川越さんの声など一切耳に入ってこなかった。

「えっ、偽名とかじゃなくて、戸籍時から全部変わっているんですか？」

パスポートのページを数枚捲ると宮城県だった私の本籍は東京になっていて、名前も『遥』一文字になっている。しかもホログラムシールが光っていて今まで気づかなかったのだが、写真に写った私の髪の毛は黒く短くなっていて、何もかもが私ではなかった。

「これ、説明は、してもらえます？」

とんでもないこの事象については誰に聞けば良いか分からなくなって、一先ずリーダーっぽい風格の川越正満さんに目を向けて尋ねた。

「過去の賜物です。聞いても現状は変わりませんが、一応聞きますか？」

「もちろんです」

「じゃあとりあえず、上、これに着替えてください。あ、別に僕の趣味じゃないですよ？」

そう言つて渡されたのはボロボロになつた半袖のシャツだった。

「え、コレを着るんですか？」

「今だけだから安心してください。亮輔、腕の見せ所だぞ」

私は案内されるがまま椅子に座ると、部屋の奥に消えていった田中さんがガラガラとキャスター付きワゴンを引いて再度登場した。男性キャビンアテンダントのようなカッコよさがある。私が田中さんに見惚れて、ほんの少し川越さんから目を離れた隙に、川越さんは私の髪の毛に何か液体を吹きつけてきた。すぐに現実に取り戻された感じがしてやや不愉快であつた。

「ちよつと、何するんですか」

「まだ分かりませんか？」

「まさか……」

「正解です」

川越さんは何の躊躇いもなく、どこから取り出したのかもわからないシルバーのはさみで、私の髪の毛を顎下くらいの長さで切り落としたのだった。

「これ、私じゃない人にやったらものすごい非難を浴びますよ」

「一言一句、その通りに言うと思っていました」

「まさか」

それを聞いた田中さんは横で腹から笑っていた。

「亮輔、これくらいの長さで、あとお願いね。気に入ってもらえると良いね」

「任せてください」

私は床に落ちた毛を見ていろいろな感情がわいてきた。約七年間、切ることができなかった髪の毛。今その過去を捨てることができたのかもしれないと、そう思えたからだ。

「ではそろそろ、あなたがいないところで何があったか、お話ししましょうか。遥さん」

私は田中さんに身をゆだねて、こう呟いた。

「お願いします」



田中亮輔准空尉
総務員



川越正満三等空佐
統括分隊長

第二話 ハルカ・カクホ

「正満、彼女が逃げます」

「何？ サトシユン、本当か」

「GPSの動きを見たところ、カフェを出て西池袋駅の方面まで向かってるぞ」

どのタイミングで怪しいと思われてしまったのか。俺は少し悔しかった。

「そんなバカなことあるか。ルアックコーヒー買いに行くって言って、テーブルに置き忘れた財布だってわざわざ取りに来たんだぞ？ 羽織りもここに置いていつてるのか？」

「恐らくそれが畏だったんだ。上着さえおいていけば戻ってくるって、普通なら考えるもんな」

「アイツ……」

梶田遥香はそうとう頭がキレルようだ。他の誰かにこのことが知られてしまう前に必ず捕獲しなければいけない。

「どうせ契約がどうこう言ってせかしたんだろ。それより正満、本当に分裂人間で間違いないのか？」

「ああ。間違いない。名前は梶田遥香だ。梶酒の梶に田んぼの田。遥香は遥拝の遥に香るって字だ。追うぞ、電話は繋げとく。絶対に逃がすな」

「はいよ」

この分隊を任された身として、絶対に目標を達成しなければいけないのだ。俺はズボンの上で数回手を擦ると是が非でも彼女を捕獲するように動き出した。

「はいよ」

「亮輔、もっち、行くぞ。サトシユンは本部からそのまま通信をつなげておいてくれ」

「「了解」」

カフェの地下から亮輔ともっちを連れ出すと、反抗的なビル風を肌に受けた。

「サトシユン、GPSはどこに向かつてる？」

そうこうしてたどり着いた場所は百貨店であった。広くてごちゃごちゃとした厄介な場所に逃げ込まれてしまったのだ。

「彼女のお尻についてたGPSは気づかれて剥がされたみたいだけど、靴の裏に貼り付いた方のGPSはさつきからずっと一直線上の道を走っているな。これ、多分バックヤードじゃないかな」

「ナイスサトシユン、靴にくっついてるってか」

「正満、滑ってるぞ」

「大丈夫、僕ちゃん大学二回滑ってるんで」

「もうそれ聞き飽きたって」

「わりいわりい。しかし狭いところに逃げやがって」

GRS がくつついた鬼ごっこほど簡単なものはない。少し息はあがってきたが遥香という少女より体力の自信はある。俺は店員の目を盗んでバックヤードに入り込むと、薄暗く段ボールばかりがおいてある人一人分の通路を急ぎ足で駆け抜けていった。ところどころハンガーラックが通路を塞いでいて、お客様精神をうたう百貨店の裏側の酷い労働環境を目の当たりにして驚いた。

「こりや酷いな」

「お、まて、正満。行き過ぎるな。止まったよ、動き」

今回彼女との接触を試みた自分と田中准空尉、川村空曹長の三名にも発信機を付けており、丁度それらの位置をモニターで確認しているのが佐藤駿一等空曹である。

「止まった？」

ここは一本道のはずだが、すれ違いもしなければ、その先に彼女の様子も見当たらない。ゆっくりと警戒しながら十歩ほど歩くと、そこには段ボールとラックの山に隠れた小さなトイレがある。これから起こ

りうることを想像して俺は髪の毛を掻き揚げた。念のためバックヤードの一本道をきよろきよろと確認し、人がいないことを確かめると女子トイレに入ったのだが、そこには誰もいなかった。遥香という少女の賢さを再度痛感する出来事であった。まさか裏を読んで男性トイレに潜っているとは思ひもなかったからである。女子トイレを出て男子トイレの中に入ると、一番奥のトイレの個室だけ扉が閉まっていた。私はこつそりと隣の個室の洋式便器の蓋に足をかけて上から覗き込んだ。そこには一人の女の子が小さくなりながら座っていて、次の瞬間目が合った。

「何、してるのかな？」

俺は心臓の位置に手のひらを押し付けて深呼吸をした。彼女をとらえることができた安心感に加えて、知らない男の人の排泄シーンを目にする結果にならなくて良かったという安心感もある。しかし、自分がさやかな安心を感じているせいで、計り知れない恐怖心を抱えている子が目の前にいる。多少の恐怖を与えてしまったせいか彼女は固まったまま動こうとせず、俺はそのまま壁を乗り越えて榊田遥香の身柄を拘束した。

「サトシユン、捕まえたよ。所持品は携帯と、1と書かれた木製のキューブ」

「じゃあその子が本体で間違いないだろう」

「良かった。そのまま総本まで戻るから、ゾラに言つて今すぐ百貨店前に車を手配して。亮輔ともっちの三人で引き上げる」

「了解」

そう言つて通話を終わると、俺は彼女に向き合つた。カフェであつた時よりも彼女の顔色が明らかに悪い。手の先の震えも止まらないようであつた。

「榊田遥香さん、あの、乱暴するつもりは全くないんです。ここでは言えない話も多くあるので、場所を変えたい。国家命令として、連行させていただきます」

そういつて百貨店の外に連れ出すと、隊員の二人と合流をし、ゾラの運転する車両に乗り込んで本部へと向かつた。車の中でも彼女は膝をきゅつとくつつけ合せていて、何度も唾を飲み込んでいた。彼女はずつと小刻みに震えていたのだが、それが分かつたのは彼女とずっと密着した状態にあるからかもしれない。

「しかしサトシユン、なんで日産のキューブなんかを手配したんだよ。五人乗るつて分かつてただろうに」

「俺も反対したけど、こっちの方が拘束した後の目標に逃げられなくて済むだろうってさ」

「これじゃあまるで学生のドライブじゃないか」

車内をくりと一周見渡すと、人がいないスペースが頭上数センチしかない。ゾラとバックミラー越しに目が合うと、俺はふと大学時代のドライブの思い出が頭をよぎった。あの頃はどこへ行くにもレンタカーを借りなければ動けなかった。足もろくに動かせない狭い車内で箱詰めのようにされていたけれど、それでも現地に着くことが楽しみて、少しの窮屈も喜んで耐えていた。あれからたった数年経った今では、そんな体力も精神的な若々しさもとくに失われていた。勝手に回想していた俺は真横で怯えている彼女のこんなどすっきり忘れていて、気づけばもう総本部に到着している。

「時間が経つのもえらい早くなってしまったな」

俺は彼女を本部のメインスペース、家でいえばリビングのようなところに案内し、その勢いで自己紹介を始めた。猫を被ったような彼女の不自然なおとなしさに少し申し訳なさも感じる。

「さて、改めまして、もう一度自己紹介だけさせてもらってもいいかな。川越正満と申します。この組織の統括分隊長です。そしてここが俺たち青海豚の拠点、総本部。通称総本。君を強引に連れてきたことを本当に申し訳なく思う。これは本当に。ただ聞いて欲しいことは多くあって、まずは気になっているであろう、私たちが何者か、そして青海豚がどんな組織か、そういった話させてもらえればと思う。君を殺したり痛めつけたりはしないから、安心してほしい」

俺の心からの謝罪はまだ響いていないようで、彼女は無言の状態を貫き通した。俺もなんて話を切り出せば良いかが分からなくなっていると、隊の中でもっとも優しい顔をするもつちが助け舟を出してくれた。

「まあまあ、最後まで聞いてくれたら少しは怯えなくて済むと思うんだ。正満、俺が話変わるよ。遥香さん、ごめんね、驚かせて。さっき彼が言った通り君に危害を加えるつもりは微塵もないんだ。僕たち青海豚って組織は発足してからまだ数年しか経ってないくらい歴史が浅い組織でね、民間には基本公表していない防衛省直轄の秘密組織なんだ。戦技研究班から枝分かれしてできた組織で、イメージしやすいところという、自衛隊みたいなものだと思うってほしい。我が国の平和と独立、そして国民の生命と財産、権利を守るために日々動いているんだ」

「それで、私に何をするつもりですか」

俺も同じ立場だったら同じことを聞くだろう。話の流れを先読みして、俺は二枚の書類を別室に取りに行った。

「君も自覚しているであろうその分裂の力は世界的に見ても需要がある能力なんだ。あ、いや、だからと言って君を使って人体実験をしたいとか、言いなりにしたいとか、そんなじゃないんだ。今、実際にこうして君が捕まったように、君は誰かに狙われて捕まえられる可能性が十二分にある。組織によっては拷問を

与えたり延々と監禁したりする可能性だってある。そういった者たちから君を守るために話がしたかったんだ」

もつちが説明を終えるも、彼女は未だ俺たちを受け入れてはくれていなかった。

「そんな簡単には、信じれません。警察、呼びますよ」

「あなたは警察という組織を信じているんですね。警察は国家公安委員会に認められた組織です。それと同様に、我々青海豚も防衛省に認められた組織です。野上泰明総理と宇野虎太郎大臣のサインがあつたら信じてくれますか」

「総理大臣に防衛大臣？」

「これが総理と大臣直々の文書で、この組織の公的活動を証明する資料です」

彼女は胸の前で組んだ手を解き、その紙を手につくと、ぎらぎらと目を見開き、口をぽやんと開けていた。何とか信じてくれたようだった。

「あなたたちを信じなければ、何か罪に問われるのでしょうか」

国の承認というものは強かった。今まで一切動きをみせなかった彼女の心も、少しだけ、この状況を受け入れようとする準備を見せたのだ。

「いえ。警察という職務質問のようなものです。ちょっと捜査に協力してください。不利益は絶対に与えませんし、傷一つつけませんから」

「分かりました」

そういつて彼女の口は承諾をした。心の承諾はおそらく遅れてやってくるだろう。

「ご理解いただき、ありがとうございます」

「まず何を？」

しかし驚いたことに、俺が説明を始める前に彼女は俺に指示を求めてきた。早く本題に入ればその分早く終わると思っているのだろう。そんなに早く解放できるわけではないのだが、極力彼女の気持ちにも応えようと、俺もさっそく本題に入ることにした。

「そうですね、本来なら事項紹介なんかして仲でも深めたいところなんです、ちょっと時間がなくてですね。自己紹介は後程移動中にでもきちんと行います。まずはこの押収品の中にあつた携帯についてですが、ロックを解除していただけますか。中が見たくて」

「分かりました」

「見させてもらいますね」

「ええ」

会話はサクサクと進む。彼女はスマホの中身を何一つ隠そうとせず、素直に要求に応じてくれる。

「すみません、この由依って人、誰です？」

「私の中学の時の部活の友達で、偶々うちに来てたみたいなんです」

「名字も聞いていい？」

「長崎です」

その一言に全員が振り向いた。俺も聞き覚えがある名前であった。

「もっち、この長崎由依って」

「うん。多分、いや間違いなく西学の子だね」

「由依を知ってるんですか」

「ええ。西京学院大学医学部専門研究員の長崎由依ですよね」

「え、ええ。私もしばらく会ってなかったんで、そこまでは詳しくないんですけど。彼女がどうかしたんですか」

「西学は分裂人間を見つけ次第、世間から隔離を強いているんです。分裂の研究の為に」

「それならいいじゃないですか。研究が進めば、人類の謎の解明に一步近づきますよね」

「いや、確かに進化の謎にはありつけるかもしれないけれど、問題はそこで行われている実験内容とかが全く分からないことなんです。分裂の事象については世間には公表していませんし、例え捕まっても拷問されたとしても誰にも助けを求めることができないんです。とりあえず本体がこっちにいてくれてよかった。西学に捕まるとほぼ間違いなく、自力では逃げられませんので」

俺は安心して壁にもたれかかったのだが、一方彼女はしつかりと眉をひそめていた。

「ちよつと待つてください。本体って、どういう意味でしょう？」

よく見ると彼女の首の筋がくつきりと浮き出ている。

「分裂のもとになったオリジナル個体って意味ですよ。ほら、これ」

To:遥香 From:由依

件名…大至急、逃げて。

本文…今遥香の家に来てて、二人の遥香に事情は全部聞いたんだけど、

もし今、青海豚団って組織の人に会ってるなら、すぐ逃げて戻ってきて。

分裂については私の専門分野だからなんでも説明できるわ。

「二人の遥香ってところ。あなたの生み出した分裂体が既に二人存在していて、その二人は西学の人に捕まっているってことだよね？」

「いえ、違います。私は本体じゃないです」

きっぱりと否定する少女に、男性隊員全員が狼狽えた。俺は壁を蹴って背を起こし、机に広げた押収物の中から木製のキューブを手を取った

「じゃあこの1つて書いてあるキューブは？ 本体っていう意味じゃなくって？」

「それは関係ないです。寝る場所を決めるときにくじ引きとして使っただけで、残念ですけど私は本体じゃないです」

目の前にいる彼女がそう口にしたことで、俺の思考回路は数秒止まってしまった。

「やっぱり需要があったのは本体ですか」

彼女は少し俯きながら無理して微笑み、そのほほ笑みがこの部屋の空気を一層虚しくさせてしまった。虫も鳴けない静寂な空気に包まれたのだが、そんな空気を温かく変えてくれたのも、もったいであつた。

「いえ。遥香さん。人権を語る上では本体も分裂体も関係ないんです。ただ、生死の決定権を握っているのは、本体であるという可能性が高いので。できることであれば本体も取り返したいってだけの話です。あなたにとっては何もかもが突然すぎる出来事だったと思います。お一人で僕たちに会いに来たってことは、もう一人の遥香さんと衝突することもあつたんじゃないですか。もしかしたら生きていていいのかわかって思ってしまうこともあつたかもしれませんが、安心してください。生きていちゃいけない人なんて、この世にはいないんで」

もっちの話聞き終えた彼女はどこ力のない表情をしていた。

「ありがとうございます。あの、私は家に帰らせてもらえるのでしょうか」

その質問の真意は今日一日だけのことでなく、そもそも帰る家があるのかを問うているようにも聞こえた。

「ああ、そうだな。サトシユン、車の手配を。大きいやつで」

「ありがとうございます」

彼女の気持ちはもつちの代弁のお陰で痛いほど理解できたが、未だ捜査を終わらせるわけにはいかなかったのだ。無慈悲であることは承知の上である。

「いや、君にはまだ手伝ってもらいたいことが山ほどあつてね。これから君の家にお邪魔させていただきたい。案内してもらえるかな」

「そうなんです。案内したら開放してもらえます？」

「安全が確認出来たら解放します。そのためにも部屋をいろいろ物色させてください」

「分かりました」

誰にも分からない未来に、その場の全員が大きくため息をつくことしかできなかった。そんな重たい空気も車に乗って外に出れば晴れるだろうと、俺たちは極力楽しそうなテンションで彼女に接することにした。車では無駄に明るくお道化た。自分がそんなキャラじゃないと分かっていたながらも、おちやらけたキャラクターで身をコーティングしている方が、心の読めない初対面の彼女とは接しやすかったからだ。

「ここが梶田さんの家ですか。ほおー。女の子の家にお邪魔するなんて暫くぶりですな。亮輔、もつち、く

れぐれも傷はつけないように、丁寧にな」

「了解。まあ正満の方が何かと傷つけるんじゃないかと心配だけだな」

「大丈夫。俺はものに傷つけても、遥香ちゃんの心には傷一つつかないの」

「もう傷ついているでしょうに」

俺らは持参した使い捨てスリッパを履いて彼女の家に上がり込んだ。白色を基調にした可愛らしい部屋である。

「この写真つてもしかして」

「はい、由依です。長距離決勝での記念写真です」

「仲、良かったんだな」

「ええ。ずっと戦ってきた良いライバルなんです。だからお願いです。敵か何だか知りませんが、何かあっても、由依にだけは乱暴しないでくださいね」

本当はそんな願い事など聞いている余裕はないのだが、情というものがこんなにも簡単に移るのだと知った。

「そうだな。約束しよう。こっちの写真は？」

「死んだ父です。忘れられなくてずっと飾ってたんです」

「そうなんだ。家族写真とかはないんだね」

「はい。母親は姉に付きつ切りで、私は父親に育ててもらっていたので、母や姉との思い出はないんです」

「お姉さん？」

「はい、二個上の姉がいます。今は入院しているんですけどね、西学で」

彼女の持つ過去は、思っていた以上に複雑で重たいものだったのかもしれない。

「聞いちゃまずかったかな」

「いえ、そんなことはないですよ。病名は聞いてないんですけど毎日しんどいみたいで、姉は幼いころからずっと病院です」

俺はふと嫌な予感がして総本に電話を繋げた。

「もしもしサトシユン、聞こえる？　今すぐ調べで欲しいことがあるんだけど。そう、お姉さんのこと、うん、そう、頼んだよ」

「姉がどうかしたんですか？」

「いや、何でもないよ。西学にいらっしやるんでしょ。危険に巻き込まれないようにしてあげたいなって思

って」

「そうですか。未だあなたたちのことを完全に信じたわけではないんですけど、でも、ありがとうござい
ます」

過去に一度死を覚悟した彼女の心の扉は、なかなか簡単に攻略できるものではなかった。

「どういたしまして。それと、ちよつと協力してほしいことがあつて」

「さつきからずつと協力してるじゃないですか」

「いや、君のプライバシーに関わることで」

「家を漁られてる時点で、既にプライバシー的にはアウトですけど」

「すみません。この組織、数年前から男しかいなくつて。ぐうの音も出ませんね。パーの音はでちやいます
けど」

「パーの音って何です」

「『まあまあちよつと待ってください』の音つてことです。ところで遥香さん、あなたの本籍つてどこにあ
るかご存じですか」

しれつとそんな話をする、彼女は俺の小ボケをすつ飛ばし、本籍は宮城県であると即答した。俺は指揮官

としての感覚をふと取り戻し、亮輔に目をやってこの後の動きを伝達した。

「亮輔、今すぐこの子と宮城まで行つてほしい」

「了解」

勿論彼女は全く状況を飲み込めていないようであつたが、亮輔はこれから自分がする任務を悟つた顔をしていた。

「え、ちよつと、急に何なんですか」

「遥香さんの戸籍をごそつと変えます」

「はあ？」

「まあまあ良いじゃないですか。家中引つ掻き回して漁られるより、いつ使われているのかすらよく分からない本籍をちよちよいといじられる方がよっぽど無害でしょ、プライバシー的に」

「それはそうですけど」

「この時間ならまだ全然間に合う。頼んだ」

そういつて大急ぎで二人を家から追い出し、静かでそこそ広いこの部屋では、もつちと二人きりとなつた。

「戸籍なんか変えさせて彼女をどうするつもりです？」

「西学が彼女の足を掴んでるかもしれない。だとしたら早いうちに個人情報を書き換えてどっか遠くへ逃がした方が良さだろう」

「なるほど」

「俺たちはもう少し彼女の家を検索しよう。それからもち、彼女の身元特定に繋がるもの、それから何かDNAを採取できそうなものがあつたら持つて帰るぞ」

「滑ってるよ」

「大丈夫、僕ちゃん大学二回滑ってるから」

「正満、そのネタ大好きよな」

「渾身の持ち球が少ないのよ」

思い返せば彼女と出会う前からこういったバカげたキャラを演じることは何度かあった。九州の南部、宮崎県で一人息子として育てられてきた俺は上京して、心のどこかに新しい繋がりを求めようとしていた一面があつたのかもしれない。今も組織として輪の中心に立つてはいるが、故郷で友達の輪の中心にいた時とはどこか自分の態度も周りの態度も違っているのだ。それは楽観視すれば当たり前のこととして処理で

きるのだが、もつと学術的に考えれば、自分の中に何人もの異なる自分が存在するということになる。そう思うと、分裂という進化の仕方は割と的を射ているかもしれない。心の中で完結できなくなった自分が実在として現れることになったのだろうか。心の中に何人も自分が存在するのならば、そのうちの一人くらいには死にたくないと思つてほしいものである。

「あ、もしもしサトシユン、聞こえる？」

「はいはい、聞こえるよー」

「ちよつとお願いがあるんだけど」

「正満から電話がある時は、お願い以外何もないでしょ」

「まあ、そうだな」

「それで？」

「大至急池袋か新宿か川崎あたりで探してほしい人物がいるんだけど、頼めるか」

「もちろんいいよ。男性？ 女性？ 大人？ 子供？」

人は一人ひとりかけがえのない、尊いものである。だれが本体で、だれが分裂体であるかなんて関係がない。彼女にも残りの人生を幸せに、安全に生きてもらいたい。そういう思いが今の俺の原動力かもしれない。

い。

「おーい、正満？ 聞こえてる？」

サトシユンの声が耳を叩く。

「あ、わりいわりい、大人の男性だ」



川村元彦空曹長
調査員



佐藤駿 一等空曹
飛行管理員



第三話 ナニトテ・カミノケ

「これを現状復帰するところまで考えると結構きついなあ」

一人暮らしの彼女の家のウォーキングクロゼットの中には、開けられてもない段ボールがたくさんあって、時間が経てば経つほど、ここまで漁らなくても良いのではないかと感じている。

「始めてから結構経つよな。正満、今何分だ？」

「だっふんだ」

「おい、滑るのは大学までにしろよ」

「先に言うなって」

手も口も必死になって動かしていると、スマートフォンが俺のケツを心地よく揺さぶってきた。

「もしもし、亮輔か？」

「おう。本籍、移し終わりました」

彼の仕事の速さには驚かされるばかりである。

「早いね。よくやった。彼女はどうか、やっぱり不満そうにしているか」

そう尋ねると、電話口からは華やかではない亮輔の声が続いた。

「戸籍に関してはただ面倒臭そうにしていただけなんです」

「ですが？」

「やっぱり勝手に髪の毛を切って染めたことは怒られましたね。『これ、私じゃない人にやったらもんのすごい非難を浴びますよ』って」

自分で命令したことではあったが、彼に返す言葉は部屋中どこを探しても見つからなかった。

「まあそうだろうな」

「全くずるいよ、こんな汚い役なんか押し付けて」

そんな亮輔の話を左耳で聞きながら俺は、部屋の中からユーフォーキャッチャーで取ったと思われるニッポリ笑った鮭のぬいぐるみを手にとった。

「ははは、悪い悪い。今度うまい魚でもご馳走するからさ」

「またそうやって奢りで誤魔化そうとする」

「表参道に焼鮭の旨い店があるんだよ」

ぬいぐるみに向かって口をパクパク動かすと、ぬいぐるみは円らな瞳でこちらを見つめてくる。うっかり持って帰ってしまいそうになる可愛さである。

「はいはい、それはそれで期待しております。それで、あとは何を？」

「写真は撮ったか」

俺は会話を続けながら持っていたぬいぐるみをテーブルに置くと、部屋から出てきたチェキを使って鮭の写真を一枚撮った。

「いや未だです」

「そしたら適当な駅でいい、証明写真を撮りに行ってくれ」

「かなり不機嫌ですけど」

「それは亮輔のコミユカの見せ所だな。急にショートカットにして色まで変えた挙句その姿を写真に収めるだなんて、俺からは頼めやしないね」

「ほんと胃が痛いよ。どうもこの髪の毛が気に入らないようで」

「ピロリ菌でも住み着いたかい？ その髪は亮輔が切ったんでしょ？」

「まあ、俺しかいないわな」

「ふふ、それは亮輔が悪いな」

俺はうっかり鼻から笑ってしまった。

「だいたい戦技研究班時代から散髪の訓練なんてなかったじゃないですか」

「それもそうだな。ま、それもそうなんだけど、女性の髪の毛を扱うのに『散髪』なんて言葉を使っている時点でイマイチな出来上がりなのは想像がつくね。適当な男子じゃないんだ。髪を散らすんじゃないくて、もつと美容を心掛けないとね」

そういつて俺は先日散髪した自分の髪の毛を掻き揚げた。

「女の髪の毛は難しいなあ。俺のツーブロなんてほぼバリカンでできてるつつうのに」

男は皆同じようなものである。

「趣味の一環で暇でもあれば理髪のことでも勉強してみるといいさ。十年後くらいには役に立つかもな」

「いやだよ、正満と違って暇じゃないし。第一なんでお国に認められた身分で髪の毛のことなんか勉強を」

「あら、亮輔ちゃんご存じないの？ 美容師もお国に認められた人たちよ。俺たちとは違って管轄は厚生労働省だけだね」

「厚生労働省？ 何で？」

「伝染病を予防しないといけないからよ」

「髪の毛切るだけなのに病気とかかかる？」

「だって刃物使うし、うっかり肌を切っちゃうこともあるじゃん？ あんまり馴染みはないかもしれないけど皮膚感染つてのでウイルスは広がっていく可能性もあるからな。だから消毒法とか勉強させるらしいよ。俺もあんまり詳しくは知らないけどね」

「へえ。よく知ってんね」

「まあ昔美容師に憧れてたからな」

「なればよかったのに」

その一言が俺の繊細なハートを傷つけた。

「だから大学二回滑ったんだって。テストで大失点だったよ」

「あ、美容師大学のことだったんだ」

「あんま蒸し返すなって」

「あ、すまんすまん。へえ国家資格ねえ」

そう言ってしまったがばつかりに亮輔も返す言葉を失って、俺は少し雑学を続けた。

「まあ国家資格をつくることで、認可を求める関係団体と官僚との間に癒着が生まれて、政治家が天下りできるシステムだつていう見解もなくはないけどな」

「感染症対策って認識の方が楽ね」

「この世の中では何事も知りすぎない方が良いつてことよ」

「落第の事は聞かなかったことにするよ」

「その方が心は楽だい」

「おい、切るぞ」

そういつて電話が無慈悲に切れると、丁度もつちから声がかかった。

「正満、外の通りがなんか騒がしいぞ。パトカーのサイレンの音がする」

ベランダから外を覗くもつちのうなじの毛が強張っている。

「外、寒いのか？」

「いや、下で女の子が刺されてます。ですが」

「ん？」

「あの顔は、遥香です」

腎臓付近が急に冷えてソワソワとした。感覚としては受験前のあの感覚に似ている。緊張しているのだろうか、怖がっているのだろうか、得体のしれないヒヤツとした感覚が俺を襲う。

「何でこんなところにまた遥香がいるんだ」

もっちは玄関まで靴を取りに行き、俺は咄嗟にもう一度、亮輔に電話をかけた。

「もしもし亮輔？ すまない、確認だが、髪をばつさり切り落とした遥香は、今そっちに居るんだよな？」

「ああ。どうかしたの」

「一人になったりはしてない？」

「してないけど、どした」

「いや、なんでもない。悪いが切る」

今刺されている彼女が亮輔の連れている遥香ではないとすれば、西学に捕まった子が生み出した遥香に違いないだろう。俺はもっちに目を見開いて眉毛で合図を送ると、もっちはベランダで腕をまくり、マンションのパイプをするすると伝って下まで降りて行つた。今日は俺のスマホが良く働く。

「もしもしサトシュン、大至急ゾラを出動させて。車窓カーテン付きのスピード車で手配を頼む。場所は俺の位置情報を見てくれ」

「はいよ」

今警察と鉢合わせてしまったら大変厄介なことになってしまう。数分もしないうちに彼女を抱えてもっち

が戻つてくると、ゾラが到着するまでの間、目を覚ました彼女の相手をするので精一杯であつた。

「何で学生服なんか着てるんだ」

そのハルカは高校のマークと思われる柄の入った青いリボンに、水色のセーター、赤いミニスカートを履いており、大学生とは思えない姿であつた。

「お兄さんたち、何で私の家にいるの？ お兄さんたちもしたいの？」

とんでもなく並外れている発言も対して、彼女の身体を支えていたもつちはスルーしていたが、俺はスルーなんてできなかった。正確に言えば、黙り込んだもつちから彼女とのコミュニケーションを任された気がした。その空気では俺も返事をせざるを得ず、うつかりと

「したいよ」

と答えてしまった。さすがのもつちも俺の言葉に口をあぐり開けて驚いていたが、俺は誤解を生まない程度の間を開けてこう呟いた。

「君の下の名前を変更、したいよ」

さすがに意味は全く理解してはもらえなかった。

「目には目を。歯には歯を。突拍子もないことを言う君には、突拍子のないことでも、と思つて」

ハルカの脳は完全にフリーズしている。それは彼女の目を見れば分かる。死に立てはやほやかつ、生き返りたてはやほやの彼女は、ややぼんやりと、心此処にあらざといった視線を俺に送っている。

「もっち、やや面倒だと思いが彼女に俺たちの事、今起こっていること、そしてこの組織のことを説明してやってくれ。それでな、彼女と一緒に役所に行つて、彼女の下の名前を変えてきてほしい」

「そんなこと、できるのか」

眉をひそめて不安そうにこちらを向くもつちに對して、俺は極力自信を持った眼を作つてこう答えた。

「ああ。下の名前は特別な事情があれば変えることができる。最悪防衛省の圧力で乗り切れ」

少し無茶なお願いではあったが、もつちは心配そうな表情を浮かべながらも命令を応諾してくれた。

「彼女血まみれですけど、何か着替えさせますか？」

「いや、この血を利用しよう。いいか一発で覚えろよ。役所に行ったらこう言うんだ。『彼女はストーカーの被害に悩んでいる。一人暮らしをしていて今回も包丁で殺されて死にかけた。住所も名前も全て変えて安全に過ごしたい。だから名前を変えることを望んでいる』ってな」

俺の即興の作り話はまあまあ良い出来だと思いが、もつちは少し腑に落ちなさそうな顔をしていた。

「でも彼女は分裂人間ですよ。包丁の傷を見せてとかつて言われたらどうするんです。傷なんか回復しち

やっているでしょうし」

一瞬だけ賛同もしたが、もつちの手に体を預けている彼女を見て、俺は服を脱がせることはできないと実感した。

「いや、もつち、大丈夫だ。医療機関じゃないからいける。令和時代は怖いよ。プライバシー面で騒がれても困るし、身体の傷を見せてだなんて、役所も分かてるだろうからそんなことは絶対に言ってこない。万が一言われたとしても『それ、セクハラです』って言っておけばそれ以上は追及してこないだろう。『今回の事件が相当ショックで話せないから、彼女の言葉をお前が横で代弁している』と、そう言うんだ。失語症ですくらいまで話は盛っていいさ」

その提案に納得したのか、もつちの目は急にキリッと立った。

「了解。名前は何に変更を？」

「そうだな、間違えにくいもので頼む。あとセンスの良い名前で」

「分かりました。しかし彼女は納得してくれるでしょうか」

「納得させるのももつちの仕事だ。そろそろゾラが着く頃だ」

そう言うのと、もつちは彼女を立たせて玄関へと向かった。彼女は下を向きながら歩いていて、時々手首を捻

つては床を摺り足で歩いた。その背中には泣いていたのだ。

「もつち、ちよつと」

俺は彼女には届かないさやかな声を使つて、もつちの耳元で囁いた。

「あの子、相当堪えてる。混乱もあるかもしれないけれど、多分、刺されたことの恐怖が大きすぎて、なんというか、多分、それ以外の恐怖に気づいていないというか、カンストしてる。カウンセリングは君が適任だと思う。役所に向かう車の中で、ちよつとでも不安を解いてやってほしい」

「了解」

自分の中にはやっぱり、どこかカノジョを守ってあげたいという気持ちがあるのだろう。

「正満はこの後はどういう動きを？」

「俺は駅前の人探しだ」

「可愛い女の子って感じじゃなさそうね。見つかると良いね」

背を向けて部屋を立ち去るもつちに、俺は声をかけた。

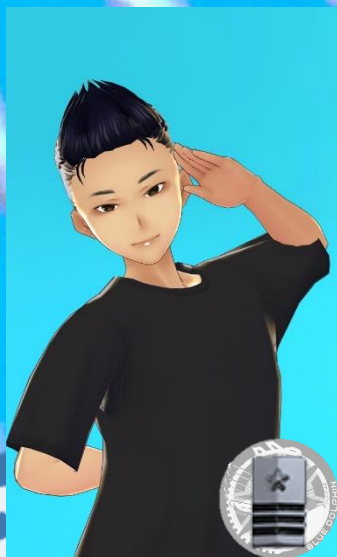
「それもついでに探してる。まあ、見つかるよ」

扉が閉まる音がして、俺は、知らない人の部屋で独りぼっちになってしまったことを実感した。とても懐か

しい感覚である。そんな一人の空間で俺は俺との対話を試みようとしたが、この部屋の現状復帰を思い出し、気が遠くなった。

「そろそろ手、動かさせてか」

暫く一人の時間が続いた。次に電話が鳴るまでは。



中島青空一等空曹
事後処理班



川越二郎空士長
医療解析員



第四話 サクセン・バクゼン

「もしもーし。あれ、聞こえてるう？」

彼の声はあまりにも陽気で、独りぼっちでややテンションが下がっている俺とはあまりにも対照的であった。

「サトシユンか、電話してくるってことは見つかったってことでもいいのか？」

「おいおい、素っ気ない返事だなあ」

「わりいわりい、俺ずっとでかい部屋で独りなんだわ」

「そうなの？ まあなんでもいいや、えっとね、本題なんだけどね、お目当てじゃない、ニアピンみたいなのが釣れたんだけど」

挨拶もせずとりあえず本題に入ろうとする俺を、突つくようにサトシユンは話す。

「ニアピン？ ホームレスじゃないのか」

「いや、ホームレスだ。しかも自由を欲しているというよりは、お金を欲してそうにしてるみたいだけど、どうする？」

「どうやって見つけたんだ」

「一人ひとり声をかけていったよ。全く、大変だったんだからね」

彼の行動力は凄まじいものである。確かに命令とはいえ、一体何が彼をそこまで突き動かしているのかは気になるところである。遥香を救いたい気持ちなのだろうか、はたまた成功に対する評価なのだろうか。

「その方、名前は何て言うんだ」

「松浦誠治まつうらせいじだそうだ。悪くはないんじゃないか？」

確かに本命の松田を基準にすればニアピンである。

「そつちもないんだろう？『松田』なんて」

「あ、悪い、まだ部屋の状態復帰が終わってなくて街に行けてないんだ」

部屋はある程度元の状態に戻り、まもなく撤退しようとしていたところであつた。

「そりゃあ正満が松田に拘る理由は分かるよ？ 柵田と松田は発音も似てるし、漢字で書いても木偏から

始まるからうつかり書き間違えても何とか修正がきく。割とベストなのは認める。だけど時間がない」

未だ彼の案を否定したわけではないのだが、彼は必死に電話越しでプレゼンテーションを進める。

「松浦も木偏から始まるし、ギリギリ柵田と松浦って韻を踏んでると思うんだけど。マスウラアみたいなの？」

「テキイゝラアみたいだね」

自分でも最近ボケのクオリティが落ちてきていることは痛感している。

「はいはい、それで、どうすんの？ 早く決めて」

口の中で籠ったような声が電話口から聞こえる。

「分かった。その松浦誠治さんで手を打とう。今どこにいる？」

スマホを片手で支えながら俺は机の下なんかを見渡して忘れ物が無いことを確認すると、そのまま玄関へ向かった。

「新宿だ」

「新宿か、電車で向かうからあと四十分くらい待つてほしい。アレは持つてきているか？」

「もちろん。結婚届と、離婚届と、（こんしやへしよつとわけ）婚氏統称届（こんしやとうしやうけい）だろ。ちよつと紙の端っこは折れちやつたけど」

「流石だな、サトシユン」

クリアファイルを使わない癖は出会って数年たっても抜けていないようである。

「それは、どっちの意味で？」

「まあどっちでも。で、松浦さんにはもう話は付けたのか？」

「いや、まだだ。でも松浦さんにとってはメリットしかないから飲むと思うよ」

「そうだな」

「確認だけど、三百万でいいんだよね？」

「ああ。国の経費つてのは便利なもんだ。五百円の弁当六万食分の税金だぜ」

「確かに。にしても正満発想がナイスだわ。苗字ビジネスとかよく思いついたね」

サトシユンはこの発案をまるで自分が提案したかのように喜び、称えてくれている。

「まあバツが増えるだけだから、実害はなさそうだしね」

「確かに。俺も苗字売りたいな」

「いやあ『佐藤』じゃ三百十円が限度だな」

「うるせえ」

そう弄られたサトシユンは、どこか嬉しそうな表情をしていることだろう。人との明確な繋がりがあることを、幸せに感じているような、そんな声が聞こえるのだ。

「さて、これで準備は整った。亮輔の遥香^ニが帰ってきたら申請して終了だな。旅行会社のエイチ・アイ・エースに知り合いがいるから、代理で旅券の申請してもらえれば、あとは全部上手いく」

もしかするとこの旅券で助けられるのは一人の遥香^ニだけかもしれないが、それでも俺はその遥香^ニの幸せを

願って今、他人の人生に向き合っているのだ。

*

「さて、ざっくりと話すということになりますかね」

三八目の遥香

俺は松浦遥にそう伝えると、彼女の顔色ばかりを窺った。当時からハルカに対し、幸せになってももらいたいという思いは変わらない。しかし、七年たった今では俺にも彼女にも別の人生と別の成長があり、当時と全く同じ思いかと尋ねられれば微妙である。

「じゃあこの名前は過去のハルカたちの頑張り和我慢の結果ってことなんですね」

彼女はポーカーフェイスが上手い。正確には感情をそもそも外に出さない性格なのかもしれない。

「そういうことだ。あまり気に入らない感じですか」

「いえ、そうではないんです。ただ、自分が何者なのかを見失いそうな気がして」

七年前に俺のしたことは余計なお世話だったのかもしれない。遥香として生まれ、冬華として育てられ、遥香であることを告げられ、遥として生きろと言われる彼女の人生からは一貫性が欠如していた。

「君はこれから人生を歩み始めればいいと思う。もちろん、急に別の名前を名乗れって言われても難しいことは重々承知している。そこは次第に慣れていつてほしい。君は人生の半分を病院で、もう半分を独居房で過ごしてきて、敢えて言うなれば君には青春というものはなかった。だけどね、だけど過去は必ずあった。どこで何をしていようが、何と名前を呼ばれていようが過去はある。アイデンティティを見失いそうになったら、まずは、その過去を自認しなさい」

「自認ですか」

彼女は口を少しだけ開けながら何かを語りたそうにしているのだが、きつとその何かが彼女自身でも明確になっていないのだろう。

「一つ質問させてください。どうして私を榊田遥香のまま独房に入れたんですか。その当時から名前が変わっていたのであれば教えてくれば心の準備もできたのにつて、そう思ったんです」

続けて投げてきた質問も、彼女が本当に聞きたかったことから若干ずれているように感じる。

「世間は榊田遥香が一連の事件を起こしていると認識している。迷惑系っていう言葉が流行ってしまうくらいにな。だから元の名前のまま拘束したんだ。その方が出獄したときに新しく人生もやり直せるかなってさ」

「そうですか」

結局この時間、心から納得した表情を見ることはできなかった。

「納得してくれとは言いません。でも、このまま放置すれば君はクライシスを起こしそうだ。余計なお世話かもしれないけれど、俺は心配で仕方がない。だから宿題です。考えてきてほしいことがあります」

彼女は口をつぐんだまま俺の目をしつかりと見てきた。

「昨日の自分と今日の自分、そして明日の自分を繋ぐものが何か、それを考えてきてください。意味わかりますか？」

少し首を傾げ上唇をぺロツと舐めた彼女に、俺は話を続けた。

「今日の夜、眠たくなったらきつと寝るよね？ 明日の朝、同じ場所で目が覚めたとして、今日の自分が昨日の自分であると思いついて入っている理由を見つけてきてください、ってことです」

「分かりました。考えておきます。それと、話を巻き戻して質問ばかりで申し訳ないのですが、そろそろ教えてくださいいただけますか。刑期十年と言われていた私を刑期七年で出獄させた理由を」

「やっぱり気になりますか」

「ええ」

これから起こす大事件の核となる話である。明日にでもこの話をしようとは思っていたのだが、彼女は思っていた三倍頭が良いかもしれない。今までの人生で彼女は人とコミュニケーションをあまり取ってきていない分、自分の内面のことになるかと未だ疎いのだろうが、独りで思慮する時間が長かった分、疑問に思った点を的確に指摘できる力が優れているのだろう。

「実は、また一人、犠牲者が出たんだ」

「犠牲者？」

「分裂人間であるがゆえに、西学に捕らえられてしまった犠牲者です。名前は大井果歩おおいかほ」
大井果歩、彼女にとっては知らなくて当然の名前である。

「なぜそれが分かったんです？」

「数日前に助けを求めに来た人物がいたんです。入ってきなさい」

そう声をかけると、すこしぼつちやりとした中学生の男の子が、二郎に連れられて部屋の奥から現れた。

「紹介します。おおい まちる 大井守君、大井果歩さんのお兄さんです」

「初めまして、まつうらはる 松浦遥さんですね。お話はお伺いしています」

松浦遥はその名前の響きに馴染みにくさを感じていたようだった。

「よろしくね。それで、正満さん、その彼女を奪還するために、私を釈放したっていいことですか」

「ご名答。松浦さん」

僅かな不信感を抱いていることは、その細い目から察知することができる。

「あの、松浦さんって何となく呼びなれなくて気持ち悪いので、せめて名前にしてもらえますか」

「すみません。分かりました。^{はる}遙さん」

「それで、私をどのように利用するおつもりですか」

彼女の不安の種は大体理解ができるが、そこはいったん触れずに話を進めることにする。

「西京学院大学は今に語り継がれる医療の文化を独自の方法で数多く生み出してきた。国でいえばギリシヤみたいな繁栄の仕方をしている。遙さんは病院に住んでいた分、誰よりもあの建物や文化に詳しい。それに由依さんや名取に接触している分一番頼りになると思っています。できる範囲で協力してほしい」

出来る範囲という言葉の定義も人それぞれであり、やはり彼女は思っていた通りの捉え方をしていた。

「それは遠回しに死ねって言うてます？」

「そんなことは全く言っていないじゃないですか」

「私が自殺を繰り返すことで『犠牲にできる私』という個体数が増える。その力を逃げ道として、いや武器

として使いたいんですね」

俺も同じ立場ならそう考えるだろう。試すような発言をして申し訳ないとは思いますが、彼女の胸中の粗方を理解することができた。

「いや、そんなつもりはない。寧ろ逆だ。その力は使わないで欲しい」

俺の自信に満ち溢れた回答にはたじろぐ様子を見せていた。やはり彼女は間違いなく、アイデンティティの喪失とともに、人権をも喪失してしまう可能性を怖がっている。

「どうしてです？」

「死ねない身体とはいえ自傷しようとすれば痛みは感じるし、それは命の正しい扱い方じゃないと思っています。生まれてくる遥ツーや遥スリーに対する責任も持てませんし、道徳的に考えればその力は行使しないと判断する方が当然です」

あまり表情を変えない彼女の放つオーラが全体的に明るくなった気がしたのだ。

「そ、そうですね。私てつきり利用されるんじゃないかと思っていたので、何とか嬉しいです」

ここで今、初めて他の何者でもない自分を受け入れてもらえたと、そう感じているのではないだろうか。それが梶田冬華なのか、梶田遥香なのか、松浦遥なのかは関係がないことにもう少しで気付いてくれそうで

ある。他人からのラベル付けや呼ばれる名前の違いが人生の決定的な差ではないということを教えてやる。

「それで、奪還方法に何か良い案があるんでしょうか」

「考えているプランはある。全員で突撃する」

「突撃、ですか」

「ああ、そうだ」

彼女の思う通り、これはかなり幼稚なプランに聞こえるかもしれない。ただし、戦略はこれしかないのだ。

「あの建物は警備も嚴重ですし、下手に捕まれば全部がおしまいですよ」

「そのための策は一通り考えてあるつもりだ。作戦を発表したい。全員で聞いてほしい」

俺がそういうと隊員の全員の顔つきがかなり真剣になり、俺はいよいよこの日が来たかとゾクゾクが止まらなかった。

「果歩さんたちが囚われているのは恐らく二つある四階建ての研究室の第一棟の方だと睨んでいる」

「それはなぜです？」

「いろいろだ。割愛する。だから松浦遥二等兵と川越二郎空士長は第一棟から囚われている被害者を全員連れてきてほしい」

「全員って、拘束されているのは一人なんじゃないんですか？」

松浦遙は気になる点一つ一つに丁寧に突っ込みを入れる。

「果歩さん以外にもう一人大人の女性が居るとの情報も入っているんだ」

「なるほど」

「そして病院から救急車をジャックしてサイレンを鳴らしながら公道を堂々と走って逃げる。これが策戦の概要だ」

「もし相手と遭遇してしまったら、どうすればいいんでしょう」

「その時は全力でピースサインをすると良い」

俺はニカッと笑って、試しにピースサインを出してみた。

「な、なぜピースサイン？」

「ギリシャではクタバレのハンドサインだからだ」

「あそこ、日本です」

彼女の突っ込みにもう一度ピースサインを笑顔でお見舞いして、俺は再び話を続けた。

「とにかく、遭遇したら走って逃げればいい。数でいえば圧倒的にこちらが有利になるはずだ」

「しかし、やっぱり作戦には穴があるように思えるんですが」

「まあまあ焦るな。まずは確実に潜り込むために入院棟と外来診療棟で爆破騒ぎを起こす」

「えっ？ 爆破ですか」

入院棟といえど彼女が冬華時代に生活していた場所である。故に気が気ではない心境であることは共感できる。

「そうだ。別に大したことはない。小規模の爆発で良い。なんなら適当にスモークを焚くくらいでいい。とにかく医療関係者の視線をそっちに注目させるんだ。この起爆に関しては佐藤駿空曹に遠隔でお願いしたい」

皆の前で名前を呼ばれたサトシユンは元気いっぱい返事をする。

「スタッフ、もとい、教授の意識をそちらに向けると、数人しかいない研究室はよりガードが甘くなる。遥二等兵と二郎空士長は第一棟、私川越正満三等空佐と田中亮輔准空尉、川村元彦空曹長は第二棟での搜索だ。総本部に残るのは二人。佐藤駿一等空曹は爆破の準備に加えて逃走経路のオペレーション、中島青空一等空曹は有事の際のオペレーションと失敗したときのピックアップを頼む」

全員が担当をメモに残していると、また松浦遥の目が光る。

「失敗できないのであれば、救急車ではなく逃走用の車を用意しておいた方がいいのではないのでしょうか」
「いいや、これだけの人数を運ぶとかなり大きめの車両が必要になる。うちにある大きな車は軍用車両ばかりだ。逃走用の車を用意した結果、それが原因で潜入に気づかれてしまつては計画は失敗。何もかもがおしまいになる。それに、その車をパンクさせられたら全員の人生が終わりだ。だったら、爆破騒ぎが起こつている中で病院関係者が絶対に傷一つつけずに管理している救急車を狙つた方が確実に良いだろうと思う」

「なるほど。ジャックの方法は？」

「それは田中亮輔准空尉に一任している。心配はない」

亮輔に目をやると、彼はもう準備ができていますと言わんばかりにピースサインを向けてきた。

「分かりました。決行日はいつの予定ですか」

「今度の日曜日。航空祭の日だ」

その一言にビビった様子を見せたのは、事前に情報を知りえなかった松浦遥のみだった。

「明後日ですね」

「焦^{アサ}つて、るのか」

「それはギャグですか」

焦っているから俺のギャグを拾えるのだろう。

「いや、純粹に聞いている。怖いかい？」

「いえ、変に一週間とかあっても緊張するだけなので。緊張する時間が短くなる分、むしろ安心してます」

怖くて当たり前のはずである。それなのに怖いと言わない彼女は、少しずつ前を向き始めようとしているのではないだろうか。

「そうか、それなら心強い。君が隊員で良かった」

第五話 カホ・カクホ

あつという間に日曜日がきてしまい、ずっと息が上がっている。松浦遥を名乗ってまで生きているのに、この作戦で失敗したらまた0からのスタートになるからである。戸籍を変えたところでバレル時はバレル、私はそれに一番怯えていたのだ。外来病棟に來た病人を装い敷地内に潜入、二度目の爆破音を合図に突入。システム化された設置済みの遠隔爆弾を総本から佐藤さんが起爆させる。一度目の爆発のピツタリ五秒後にもう一度爆発が起こるように設定されていて、その爆発音でガラス窓を蹴破る音を掻き消し突入しろという指示だが、そんなにも簡単にいくのだろうか。私はその時が来るのを息を潜めながら待っている。その時、ドガアーンという音とともに黒い煙が立ち上ったのが見えた。予想以上に爆発が大きすぎるのだ。しかしそんなことを言っている暇もなく、五秒を数え、窓に向かって足から突入した。ピツタリ五秒後、また大きな爆破音とともにおびたらしい量の黒煙が上がった。やかましいサイレンが館内中で響いており、突入した自分ですら突入したことを忘れるくらいの大事件が起こっている。私は棟の東側から二郎さんは西側から潜り込み、誰とも鉢合わせることなく館内で合流することに成功した。やつと落ち着きを取り戻した私は一点、おかしなことに気が付いた。外の爆発が止まらずにまだ続いているのだ。

「なんで、佐藤さん。もういいのに。ただでさえ大きい爆発だったから、これ以上やると負傷者が出てしま

う」

いや、私は気づいていた。もう負傷者はでているだろうと。まだ果歩さんを見つけることはできていないが、第一棟の階段に差し掛かったところで誰かが大声で会話しているようだ。

「ええい、どうなつていやがる」

「先生、入院棟と外来棟で呼ばれています。すぐに向かってください」

「うるさい」

「しかし先生、これほどの事件が起きているんです。先生が出ていかないとこの病院は混乱したままです。爆発事故が起きてなお責任者が出てこないともなれば、市民からの評判も落ちてしまいます」

「それはそうだが。しかしここには患者の命よりも大切なモノがある」

病院の中に患者の命よりも大切なモノなんかあるのだろうか。私はその発言に静かに失望した。自分が入院している時には見えていなかった裏の世界を見てしまったからだ。

「お任せください。それは私が見張っておきます」

「信頼していいんだな？ 名取」

「もちろんです。先生、電話も鳴っていますから」

「分かった。くれぐれも、気を付けて」

「はい。對馬先生こそ。お怪我のなさらぬように」

非情にまずい状況である。對馬教授と一緒にいた人は名取といった。名取と言えば七年前のあの日、救急車をバックで運転していた人物だ。タダモノではない。当時の遥香と違って私は運動もできない。彼女に分かりでもしたら一発で人生が終わってしまう。私と二郎さんは二手に分かれ、それぞれ別の階段から順に登っていくことにしたのだが、私のいる方の階段から、誰かが駆け下りてくる音がした。すぐさま柱の裏側に隠れると白衣を着た男性が現れて出口の方に向かって行つたのだ。

「對馬……教授」

病院への違法潜入はかなり心臓に悪い。彼が完全に見えなくなったところで私は階段をせつせと登り、二階まであがったところで呼吸を整えた。

「七年も運動しなかったせいで体力が半分以下になっているな」

肩ではあはあ息を吸い込んで顔を上げた時、二階と三階の踊り場にいる一人の女性と目が合ってしまったのだ。例の名取さんと鉢合わせしてしまったのだ。しかも彼女は私のことをみてこう呟いた。

「……梶田、遥香」

髪型も髪の色も変え、七年も経って少し顔も変わっているはずなのに、完全に身元がバレてしまったのだ。体力もない、武術も知らない私には後がなく、今できることは限りなくゼロに等しい体力を振り絞って、逃げ撒くことしかなかった。彼女が二階に降りてくる前に、彼女に背を向けて今出せる全力で走り去ることにした。恐らく彼女の方が体力もあり足は速いだろう。一階の踊り場スペースの掃除用具入れの中に隠れたのだが、それからしばらくたっても彼女は現れなかった。果たして逃げ切れたのだろうか。もしも分裂体を作っていたら、体力はこの半分だったわけで、きっと逃げきれなかっただろう。分裂体を作らなかったことで遭遇リスクを抑えられると思っていたが、まんまと敵に遭遇してしまった自分を呪ってしまいたい。それから反対側の階段から三階まで静かに駆け上って息を潜めていたのだが、彼女が追ってくる様子は以降もずっと感じられなかった。上手く撒けたのだろうか。そんな簡単に逃がすはずがないと待ち伏せを警戒しつつ、階段をもう一階分登った。彼女から逃げることでできたのは不幸中の幸いだったが、その分警備が厳重になってしまったことは不幸中の不幸だろう。しかし彼女は何故追ってこないのだろうか。新たな分裂人間の確保より、今捕らえている分裂人間の死守を優先するために追ってこなかったのだろうか。そんなことを考えるがあまり周りを見ていなかった私は、私を呼ぶ声にハッとした。

「冬華、冬華？」

女性の声が聞こえる。青海豚の人間ではない。松浦遙として生きる私のことを冬華と呼ぶ女性は由依ちゃんか、或いは……

「母さん。なんでここに」

「冬華なのね」

七年越しの対面であった。お互い多少は老けているものの、顔を見れば一発でお互いを認識することができた。

「何でここに？」

「冬華が病院を抜け出した後、私は分裂人間の素質を持つてるって言われて、それ以来ずっとここで軟禁されていたのよ」

「軟禁？　酷い拷問はされてない？」

もちろん母さんのことは七年間忘れたわけではなかったのだが、いざ急に目の前にするとどうコミュニケーションションを取れば良いか分からないものである。すこし大人になったからか、母さんとの間に少し壁を挟みたくなってしまったのだ。

「ええ、今もまだ分裂人間として確定したわけじゃないからね。ずっと血液検査とか身体検査ばかりよ」

「ならよかった。よくないけど。それで、何で今母さんがここにいるの？」

「それは、この方が助けてくれたからよ」

ブレーカーが落ちて薄暗くなってしまった病院の奥から現れたのは、二郎さんだった。

「三階で果歩ちゃんを解放した後、四階に来てみたらお母様がいらつしやったので」

二郎さんはまるで妹のような振る舞いを見せる女の子の手を引き、彼女の頭をぽんぽんと優しく叩いた。

「果歩ちゃんまで。いつの間に。ありがとうございます。これで任務は完了ですね」

二郎さんの喋っている姿はあまり見たことがなくて、その仕事の速さに驚いた。ギャップ萌えとはこのことかもしれない。

「まだ逃げ切るまで気は抜けないけどね」

「第二棟班と合流して脱出しましょうよ」

「だな。無線での情報だ。佐藤によると第二棟の班はもたついているらしい。今すぐには戻れないそうだ。

長崎さんと鉢合わせしたらしい」

「由依ちゃん、だつて？」

「ああ」

「私さつきそこで名取さんに見つかったんです。人質はこっちにいたのに、なんで第二棟に？ 三人がかりでも手こずるってどういう状況なんです？」

思い返せば不審な点は多く、彼なら何かを知っているのではないかと思い、二郎さんに尋ねることにした。

「これは単に果歩ちゃんを奪還するだけの策戦ではないんだ。本人がいる前であまり大きな声で言えた話ではないんだけど、人一人のためにここまで大胆には動けないんだ」

「青海豚の本当の狙いは何？ 二郎さん」

あと少しで真相にたどり着けそうな気がする。そう思うと居ても経ってもいられなくなって、私は二郎さんを勢いのみで問いただした。

「R策戦だ」

「R策戦？」

聞かされてもない策戦名に、なぜ事前に教えてくれなかったのだろうと不信感がこみあげてくる。

「特に口止めもされてはいないから伝えるよ。我々青海豚の傘下には松島国立病院、通称松^{まつしま}国^{こく}院^{いん}っていう病院兼研究機関があるんだ。元軍隊医療班のメンバーによって運営されているんだが、どうしても最新医療技術に弱くてね。そんな松国院で研究しようとしているのが再生医療技術なんだ」

「じゃあ、その医療技術向上の為に情報でも盗みに行っているってこと？」

私の質問に二郎さんは即答した。

「簡単に言えばそうだ。西学は人類の新たな進化の根源を染色体の中から見つけ出したんだ。中学生か高校生くらいの時にサヤエンドウの実験をしたりしてない？」

「私、入院していて学校には通っていなかったの。でも本では見たことがあります。メンデルの法則ですよね」

「そうだ。染色体の中にはいろんな因子がある。植物でいえば赤い花を咲かせるための因子、白い花を咲かせるための因子とかが分かりやすいかな。それと同じように人間にも様々な因子があつて、今回発見されたのがスモール ϵ 因子っていうものなんだ。心の動きによつても左右される厄介な因子らしい」

思っていたよりもずっと興味深い話であるが、まだ話の帰着点が見つからない。

「そのスモール ϵ 因子は人間の何を決めるんです？」

「回復力だ。従来の人間は傷の修復を行うラージR因子しか持っていないくて、生存する人間全員の遺伝子の型は $\alpha\alpha$ 型の一択だったんだ。そこにスモール ϵ 因子という回復力に特化した因子が生まれてしまつて、ラージがた遺伝の過程から $\alpha\alpha$ 型になつてしまった人間が分裂人間と定義づけられているんだ。回復力に特化してスモールがた

る、つまり生き返るってことだね。この回復の力は国防にも貢献できる内容でさ、松大院は再生医療の為に全力で研究をしようとしているんだけど、西学はスモールr因子を殲滅させようとしているんだ」

「殲滅？」

私が知らない世界の物語はどんどん進んでいく。

「そうだ。人類が生殖活動を経ずに増やしてしまうことをあまりよく思っていないくて、スモールr因子を殲滅させる薬の開発に成功しているようなんだ」

「それって」

「そうだ。その薬を使ったスモールがたの人間は消滅するし、ラージスモールがたの人間には障害が残るかもしれない。だから国は治験の承認もしなければ、研究費も打ち切りになっているんだ」

正満さんが黙っていた理由も少なからず理解はできた。この策戦に自分の将来の死の可能性がかかっていると事前に聞かされれば、きっと私は怖気づいていただろう。何が何でも成功させたいと思う気持ちから生じる余計な行動を極力減らそうとしたのだろう。その判断には納得ができたと同時に、少し自分の足が膝を軸に前後に震えているのが分かる。人間というのは単純で精密な生き物である。

「今無線で総本佐藤からの指示があった。一分後に第二棟の救急車に乗り込み、四階からロープを伝って

飛び降りてくる三人を回収して羽田に向かえ、とのことだ」

私は周りを見渡して静かに返答した。

「了解です。しかし、田中さんがいないんじや救急車はジャックできないんじや」

「いや、できる。その二人を連れていくぞ」

二郎さんの指示で建物の一階まで降りると、彼は停まってある救急車に駆け寄って、運転席の扉の取っ手に手をかけた。すると、ピピという可愛い音とともにランプが二度点滅しロックが解除された。

「早く乗り込め」

焦る気持ちを心の中だけにとどめながら、横の扉から救急車の中に入り込み、全員が入ったことを確認すると内側から手動でロックをかけた。カーテンで窓全部を覆い、外側から中が見られることはないだろう。これで残り三人を回収できれば問題ない。

「二郎さん、この救急車の鍵、開いていたんですか？」

「いいや、リレーアタックを仕掛けたんだ」

「リレーアタック？」

彼の口からは難しい単語ばかりが出てくる。

「そうだ。最近はやりのスマートキーを逆手に取った、言わばドロボー技だ」

「スマートキーって、上手く言えないですけど、あれですか？」

「スマートキーってのは鍵穴に鍵を刺さなくても身に着けているだけでロックを解除できる鍵のこと。その仕組みを紐解くとね、スマートキーからは常に微弱な電波が出続けているんだ。そして車はその電波を識別して鍵を開けたり閉めたりしている」

二郎さんの説明したものと私が想像したものは恐らく同じである。

「でも鍵は持っていないんじゃない？」

「その鍵を作ってしまった方がいいのさ。田中くんが作った受信機でスマートキーの電波を拾い、その電波を増幅させるんだ。その増幅した電波を受信する機械を僕を含む各員が持つていて、見事スマートキーの出来上がりってわけよ。イモビライザーもこれと連動しているし、電波を遮断する入れ物にでも鍵を入れて嚴重に保管していない限り、リレーアタックは回避できないんだ。もちろんエンジンだってかかる。ほら、かけるよ」

三人の到着を感じ取った二郎は救急車にエンジンをいれた。

「遙さん、救急車の後ろを開けて」

長いロープを垂らして四階からすると降りてきた三人を救急車の中に回収し扉を閉めると、二郎はアクセルを踏んでこの病院を勢いよく飛び出した。

「いやあ間に合って良かった」

「それで、入手は出来ましたか？」

「ああ。病院のコンピューターから松国院にも転送しておいた。今頃受け取ってるだろう」
息を切らした三人は、総本部に居る時よりどこか凛々しく見える。

「マサ、目的地は」

「もちろん羽田だ」

「了解。この後の詳しい策戦の伝達を頼む」

「了解道中肘栗毛」

「膝です」

兄弟のじゃれ合いが一通り終わると、二郎さんは救急車のサイレンを鳴らし、車のスピードをさらに一段階上げた。

「それでは、今から次の計画を伝える」

全員に対して堂々と目を配る彼の姿からは、今まで以上の自信を感じ取った。

「作戦って言ってもこのまま逃げ切れば勝ちなのでは？」

私の質問に対しても、よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりのニヤけ顔を見せてきた。

「その逃げ切り方を説明する。外を見て見ろ。既にドクターヘリがこの救急車を追ってきている。このまま走り続けても勝てはしない。そこでだ、俺たちはこれから、ヘリよりも速く長距離を移動できるものを使う」

「ヘリよりも速いもの？ 飛行機？」

ヘリよりも速いものと言われて航空機か新幹線くらいしか思いつかなかった自分はまだまだ、人生経験が少ないのだなと痛感した。

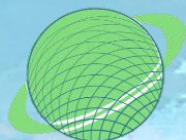
「防衛省航空自衛隊所属軍用機T4、その名も、ブルーインバルスだ」

なぜ皆が空軍の階級を持っているのかとずっと気になっていたのだが、まさかこんなところでその結論が出るとは思っていなかった。訓練のくの字も知らない民間人がいきなり戦闘機に搭乗できるものなのだろうかと不安でいっぱいであった。



厚生労働省

管轄



防衛省

・宇野虎太郎防衛大臣

陸上自衛隊

海上自衛隊

航空自衛隊



松島国立病院

調査協力



突然変異専門調査臨時任務分隊



第110飛行隊



ドルフィンキーパー(クルー)

ドルフィンライダー(パイロット)

西京学院

西京学院大学医学部附属病院

- ・二宮和之 教授(辞任) 分子生物学連合学会元会長
- ・對馬貫太 教授(後任) 分子生物学連合学会会員

医学部生物学応用生命学科、特殊遺伝子専攻



- ・長崎由依 上席主任研究員
- ・名取理乃 招聘研究員

第六話 トウソウ・シソウ

「でも、私たち操縦なんて」

「安心して大丈夫、ブルーインバルスは二人乗りだ。既にドルフィンライダーが待機している」

その聞きなれない言葉に私は復唱した。

「ドルフィンライダー？」

「T4という機体はそのフォルムから青い海豚と呼ばれていてな、その海豚を操縦するパイロットはドルフィンライダーと呼ばれているんだ」

青い海豚というワードがあまりにも唐突に出てきたものだから一瞬聞き飛ばしてしまったが、今やっと、この組織の名前の由来が知れた。

「なるほど。しかし軍用機が堂々と日本の空を飛んでいいものなのでしょうか」

そんな素朴な質問は的外れな質問でもなかったようで、正満さんは左手を一回ぱちんと鳴らして私に指を向けてきた。

「だから作戦日を今日、航空祭の日に合わせたんだ。宇野大臣にも許可はとっている。東京の空をカッコよく飛んできなさいってさ。今羽田は特別に第二ターミナルのC滑走路を貸し切りにしている。ここからな

ら飛ばして三から四十分もあれば空港には着くだろうね。松島基地まで逃げ切れば部外者は簡単に中へは入れない。羽田に着いてからが勝負だ。どうせ走行中は手出しできないんだからな。少しは仮眠でも取っておけ」

正満さんはこの緊張した空気感をなんとか壊そうとしており、その一生懸命な感じが伝わってきて些細な可愛いさを感じる。私の知らないギターの音楽を流し始めていたところまでは覚えていた。少し落ち着こうと目を閉じてみたのだが、車の上でサイレンも鳴っている中ぐつつり寝られるはずもなく、浅い眠りについた私は消防車か何かのサイレンの音で目を覚ました。

ヘリから手出しは出来ないものの奴らは諦めずに追いかけてくる。羽田に着いてからが勝負だと思っていたが、途中ですれ違ったはしごを背負った消防車に目を付けられ、今、けたたましいサイレンと共に追いかけている。

「スーパージャイロライダーだ」

川村さんが呟く。

「スーパーじゃろライダー？」

「スーパージャイロライダー。あ、俺も噛んじまった。ジャイロライダー。十五メートルのはしごを背負った

救難用の車だね」

「なるほど」

確かに状況を考えれば、爆発騒ぎのあった病院から一目散に逃げていく救急車なんて怪しさに満ちている。恐らく上空のヘリコプターとも無線が繋がっているのだろう。

「ヘリと無線を繋ぎますか？」

そういったのは二郎さんだった。

「ああ。奴らの情報を探りに行こうか。みんな余計なことは喋るなよ」

正満さんも乗り気だったのだが、私にはその感情は理解できなかった。その不用意な行動に少し不安すら感じてしまう。固唾をのんで見守るとは本当にこのことで、何をすることもできない私は、目でしっかり彼らの手の行方を追いながら、ただただ黙っていることしかできなかった。そして無線は繋がってしまった。

「あら無線を繋げてくるなんて結構な度胸ね」

この声は第一棟で聞いた声と全く同じ声だった。

「ヘリの操縦士か」

「ええ、名取です」

「川越正満だ」

どちらから話を切り出すのだろうか、ソワソワしながら嚙んだ上唇は思った以上に張りがあった。

「最初に忠告しておきますけど、この会話は誰でも聞けるものだと思うってくださいね。下手に脅したりなんかするとメディアで叩かれるかもしれませんよ」

名取さんの牽制に正満さんは動じる様子はなさそうであつた。

「承知しています。どこまでついてくる気です？」

「あなたたちが止まるまで、ですかね」

「ヘリには名取さん、お一人で？」

「さあ。でも安心しないでくださいね。いつでもこの機体をぶつける心の準備はできていますので」

そのセリフはどこまで本当なのだろうか。だとすると、青海豚が盗んだ情報は相当大きなものだったのか
もしれない。

「そうですか」

「それで、わざわざ無線なんて繋いで、何の用です？」

「いえ、これ以上お話することはありません。それでは」

気づいたときには無線を切っているこの状況を見て、私は何一つこの行動の意味を理解できなかったのだが、正満さんはどこか嬉しそうな顔をしている。勝利を確信したのだろうか。正満さんの「やれ」という一言の合図を聞いて、私は救急車の後ろの扉を開けた。はしご車は車の上のはしごをグングン伸ばして、無謀にもそれで救急車を攻撃しようとしているのだ。ヘリコプターからの指示でもなければ、私たちを攻撃することにまでは至らなかっただろう。正満さんの無線の目的ははしご車とヘリの通信を止めるためだったのだろうか。私は追跡してくる後ろのはしご車にめがけてストレッチャーを道路に放った。救急車の中の余計な資機材で道路を塞ぐと、二郎さんは制限速度を超過し路側帯を突っ切った。同乗している母さんや果歩さんもおびえた様子を見せていたが、私はどこか懐かしい気持ちに陥った。七年前も高速道路で同じことをやったなど。はしご車は一気に視界から消え、残すはヘリ一機。ヘリは勝手に滑走路に入ることができないため、事前に伝えておいた経路から救急車だけが通行を許可されれば、必然的に西学部隊は後れを取るようになる。このまま走れば問題なく逃げ切れると、私には予想ができた。

「しかしなぜブルーインパルスの使用が許可されたんですか。腐っても軍が所有する傷をつけてはいけない戦闘機のはずなのに」

「実はずっと前から退役が決まっていた。去年の十二月に次期戦闘機を日本で開発することが決まった

んだ」

今まで静かにしていた田中さんも身を乗り出して話してきた。

「三菱重工に河崎重工、西芝に富士通にNEC。日本のトップ企業が集結するんだ。これはアツいよ」

「そうなんですね」

「本来は『B』戦闘機を降ろす予定だったんだが、『A』ブルーインバルスも最近調子が悪くて。アクロバットチームが『C』戦闘機も使用するようになってから、ブルーインバルスを航空自衛隊と共同でうちの分隊が借りるようになったんだ」

その話のスケールの大きさには驚くばかりである。

「いいか、まもなく着くぞ」

そこには一列に整列した戦闘機が七機あって、うち一機は灰色の機体だった。

「あのグレーのやつもブルーインバルスですか」

「ああ、あそこに待機してるのは中等練習機っていう随伴機体だ。いいか、救急車を停めたら奴らに捕まる前に走って戦闘機に乗り込め。機体のしっぽに番号が書いてある。T4-2に遥二等兵、T4-3に田中准空尉、T4-4に川村空曹長、T4-5にお母様、T4-6に二郎が搭乗しろ。俺はT4-1に果歩ちゃんを乗せてから随伴機

で飛ぶ。離陸の順は奥にある1から昇順。各機体まで走ったらドルフィンライダーの指示の元Gスーツと機内用無線を着用しろ。いいな。それでは行くぞ、行け！ 走れ！」

彼からはもうふざけた姿は見れないのではないかと感じるほど、今の正満さんには覇気がある。彼の合図を元に救急車の扉が開くと、皆が一斉に走り出した。私も置いて行かれないように必死で走ろうとすると、果歩ちゃんが涙目で私の腕を掴んできた。

「わたし、ちよつと怖い」

今更どうしようもない相談だった。果歩ちゃんもそれを分かっていたから今言ってきたのだろう。後戻りができないこの状況で、私は彼女の不安を極力取り除いてあげようと藻掻くことしかできなかった。

「飛行機、乗ったことある？」

「ううん。でも映像でなら見たことある」

「そっか。ジェットコースターとか苦手かな？ 高いのが怖い？ 私は正直怖いんだ」

「ううん」

「じゃあ速いのが怖い？」

「違う」

彼女が怯えている理由、それは聞かされるまで分らなかった。

「墜落しそうなのが怖い。ジェットコースターは絶対安全だけど、これは人が操縦しているし」

「そっか」

策戦が始まってしまった以上、中止を促すわけにもいかない。私は何とかしてあげたいと思い、自分の胸ポケットを走りながら弄った。

「ねえ。私ってね、今までの人生で何かと事故に巻き込まれることが多かったんだけどさ、これを持っていたときは何故か絶対死ななかつたんだよね」

私がそれを果歩ちゃんの目の前に持っていくと、彼女の満面に微笑みが浮かぶ。今までよりも一段と表情が明るくなったのだ。これには本当に効力があるのかもしれない。

「そんな不思議な力が込められているお守り。これを手にしたのは七年前のことだから、どういう経路で持っていたかはあんまり覚えてないんだけどね、果歩ちゃんにあげるわ」

そう言って交通守りを手渡すと、彼女は何かをボソッと呟いた。

「これって、失くしたやつ」

「え？」

戦闘機の近くまでくると、いよいよエンジンの音が大きくなってきた、声は段々と聞き取りづらくなっていた。

「ううん。ありがとう！　これで私、大丈夫な気がする！」

「よかった。じゃあまた、松島で！」

私は今出せる全力をもって2番の機体に向かって走った。Gスーツと無線の着用を済ませ、機体に入り込み、ふと後ろを振り返ると母さんがまだ機体の下でもたもたしていた。

「母さん、何してるの」

私は座席に座りながら無線越しに叫んだ。西学の人たちが走って滑走路に入ってくる様子が見える。思っていたよりもずっと早い。

「トラブルだ」

見ず知らずの男性の声がイヤホンを通して耳元で聞こえる。おそらくドルフィンライダーのうちの一人だろう。

「川越正満三等空佐、伝達です。エンジンのタービンブレードが破損していて、エンジン内部を損傷しています。おそらくバッフルの交換をしなければ飛ばません」

端的で無駄の無い状況説明に本物の軍隊というものを見せつけられた気がした。

「了解、遥さんのお母様は随伴機に案内します。そのままGスーツを着て随伴機長の誘導に従ってください」

トラブルに対する処置も早的確であったが、そのやり方に二郎さんが問いかけた。

「マサ、したらお前はどこに乗るつもりだ」

「俺はここに残る。ゾラにでも回収してもらうさ」

「しかし、西学はもうそこまで来ている。今から青空空曹を呼んでも間に合わないのでは」

「大丈夫、俺は役目を十分に果たした。有事の処理は任せたよ、二郎。各機飛べ」

そう言いきった川越さんは自ら無線を切って機体に背を向けた。無機質な英語の航空無線が聞こえてくる。英語は一切理解できないためお経と思って聞いていると、ふと、今までの出来事の中の不可解な点に気が付いた。なぜだろう。なぜ敵対している西学の情報を青海豚が得ているかだ。R因子の情報なんて西学からしたら機密事項のほうである。あの指示は、囚われている果歩ちゃんが第一棟にいること、R因子情報が第二棟にあることも分かったうえで策戦であった。それどころか、母さんがいることも分かって戦闘機を手配している。そもそも果歩ちゃん奪還と銘を打っていた策戦だったが、果歩ちゃんがいなければどうし

ていたのだろう。いや、果歩ちゃんが分裂人間であるが故に捕まったとして、もう一人の果歩ちゃんはどこにいるのだろうか。考えれば考えるほど見落としていた穴と穴が繋がっていく。そういえば班員紹介の時も本当はもう一人メンバーがいたって言うていた。西学の情報をキャッチできる人なんて一人しかないない。「見えてきたぞ」

名取さん、だからあの時追ってこなかったんだな。救急車の鍵を名取さんが身に着けていたとしたら、リリースアタックの成功率も格段に上がる。救急車からドクターヘリに無線を繋いだのも、同乗者がいるかどうかの確認をしていたってことだろうか。あの反応から見てドクヘリには由依ちゃんも乗っていたはず。いや、乗っていないと流石の名取さんでも一人でヘリと救急車の両方は回収できない。二郎さんの反応を見る限り、随伴機の故障は本当だろうかから川越さんがここに残ることなんて想定していなかったはず。ただ、名取さんが本当に諜報員であるかどうかの確認は持てない。元青海豚の班員だったとしたら、西学には途中から入ったことになる。そんな怪しい人を對馬教授は採用するだろうか。

「いや、違う」

私の脳の回転速度は戦闘機のエンジンのように徐々に上がっていく。分裂細胞のことを知ってしまった以上、民間人に情報を漏洩してほしくないという理由から条件付きで採用にはできるかもしれないが、

よそ者に全情報は託さないだろう。だとしたら、未だ青海豚の知らない情報が眠っているはず。對馬教授も名取さんを怪しみ試したとまで考えられるな。だとしたら由依ちゃんが危ない。分隊長の正満さんと名取さんがタッグを組んでいること自体が脅威である。

「由依ちゃん……」

未だ私に備わっていない自分の行動指針が欲しい。由依ちゃんはヘリの操縦はできないはず。そうだとしたら元青海豚の名取さんがドクヘリを操縦しているだろう。川越さんが救急車の運転をするのは変だから、救急車にいるのが由依ちゃん。由依ちゃんが何も事情を知らないとすれば、ヘリに川越さんを搭乗させる方が安心と考えるだろうから、川越さんが乗っているのは多分ドクヘリだ。この後の正満さんの逃がし方を打ち合わせているに違いない。

「きゅ、救急車」

私が最後に寝た場所、それは救急車の中だった。今自殺を図れば救急車までは戻れる。由依ちゃんと一対一で話せる絶好の機会になる。しかし、私は今東京の空。座席に固定されていて身動きは取れない。パイロットの飛行の邪魔をすることは物理的にできない。機長に話しかけるならこの無線だが、この無線を使うと他のブルーインパルスに搭乗する他の隊員全員にも話が聞こえてしまう。説明してもそんな勝手な行為は

受け入れられないだろう。松島到着からの再出発までは待てない。あちらが先に西学に着いてしまうだろう。かといって、戦闘機の風防ウインドシールドを開けて身を投げ出すこともできない。必死に自殺の仕方を考えているなんてなんとも情けないのだが、一つだけ見つかってしまったのだ。とても良い死に方を。

第七話　デイー・デイー

「由依ちゃん！」

ぼーっとバックミラーを見ていると可愛い女の子の揺れる髪の毛と考えるんだ瞳が目に入ってきた。ワタシの予想は的中していた。救急車の後ろで目を覚ました私はバックミラー越しに運転席の由依ちゃんに話しかけた。

「どうしてここに」

「それは一回置いておいて、二人だけの話があるから聞いてほしい」

由依ちゃんはチラチラとこちらに目をやりながら戸惑った様子を見せていたが、時間との勝負には負けられないと思い、お構いなしに話を続けた。

「七年前のね、七年前のあの高速道路での事故をきっかけに、私は政府に監禁されるようになったわ。出獄した後の居場所が無かったが故に、今まで私は青海豚のお世話になっていたの。今日の爆発騒ぎの時に知っていた情報なんだけど、青海豚は川越正満っていう男の指示でR因子情報を奪うことに成功したみたい。これをね、青海豚傘下の医療団体がこれから解析を始めようとしているの。もしかしたら由依ちゃんも気づいてるかもしれないけれど、この一連の事件を裏で操っていたのは名取さんよ。R因子以外に何か、對馬

教授と由依ちゃんだけで共有していることがあるでしょ。その一手を使つて今ここで動き出さないと、これから先の未来は全て政府機関の思い通りになるわ」

私には特に何かアイデアがあるわけではなかった。漠然とした話に平然とした装いで耳を貸す由依ちゃんを見ると、私がしていることは無意味であるかのように思えてくる。ただ、一番多く情報を持つて広く世界を見ている人に私の情報を託すことで、未来は良い方へ変わるのではないかと思つたのだ。

「思い通りになるって？」

「R 因子情報の解析が進めばその力を無効化することも、意図的に注入することもできるようになるはず。それは人類の進化を政府が握ることになる。普通に考えれば政府は傘下の医療班を大事にするだろう。まだ身に起こつたことではないからイメージできないかもしれないし、私もイメージで来てるわけじゃないけれど、未来が崩壊するわ。ハイカイイエで答えてほしい。一ついい提案があるんだけど、乗ってみない？」

「ありがとう。でも答えはイイエよ」

彼女がハンドルを左に切ると、私は少しバランスを崩し、その数秒間だけ我に返る時間をもらつた。

「なぜ？ やつぱり突然すぎたかな」

私はそこまでコミュニケーションがうまいわけではない。今まで読んできた小説で多々出てきたこの手の提案に対する返答はハイ一択である。由依ちゃんの回答に私は返せる言葉が見当たらなくて生唾を飲んだ。「そこまで考えてくれていたんですね。ありがとうございます。でも大丈夫。冬華が言った通り、名取さんには話していい情報があるので。R因子情報だけでは分裂人間は作れないし消滅させられないと思いますので」

彼女の後姿は自分より一回り以上大きかった。

「それって？」

太陽に照り付けられた彼女の左頬の光は、彼女の心の自信と相乗して美しく輝いている。

「もう一つ、D因子情報っていうのがあるんですよ」

「それって、私に話していいの？ 私が国の諜報員かもしれないって疑わないの？」

自分でも自分の立場が分からなくなってきた。私は何を言っているのだろう。

「冬華、冬華は冬華よ。ここに來たってことは、一度自殺したってことですよね？ そりゃあ諜報員の可能性もないことはないかもしれないけれど、命を張ってこれを私に伝えに來たって思えば、信じてもいいのかなって、そう思いますよ」

私は私、それは答えになっているのだろうか。今の自分にはまだ分からない。

「なんだか変な感じですね。遥香のお姉さんだと思っていた人が同い年で、最後にあったのが七年前だなんて」

「そうだね。昔、ハルカと一緒に何回か会いに来てくれたことがあったわね。ため口でもいいのよ。昔みたいに」

「ありがとうございます」

由依ちゃんは結局、ぎこちなく敬語を話し続けた。そんな大昔の事は今には繋がっていないのかもしれない。これは過去の私と今の私が別人であることの証明なのではないだろうか。少し悲しくもあるが、今の私は今の私として、今の私が考える使命を全うしたいと思う。

「それで、さっきの話。もう一つの因子って？」

「あ、えっと。青海豚が持つて行ったR因子は修復と回復のプログラムなの。分裂人間に欠かせないもう一個の因子がここにはないことに気づかない？」

その質問に対する答えは明確であった。二郎さんの話を聞いた時から疑問に思っていたことである。

「それって、生死？」

二郎さんの話では、修復と回復の極限が蘇りという仮説で進んでいたが、私はその仮説にしこりのようなものを感じていたのだ。

「そう。人間にはね、意図して死ぬっていう情報も刻まれているの。考え方は致死遺伝子に似ているかもしれないわ」

「致死遺伝子？」

話の導入から既に、複雑な予感がして肩がソワソワとする。

「例えば魚の鮭はね、一度生殖活動を行うことでホルモン作用が働いて、自動的に死ぬようにプログラムされているんだ。何でかって、気になるでしょ」

「うん」

「それはね、稚魚が成育する環境に栄養素が足りないからなんだ。親の鮭が死ぬことによって稚魚が育つ環境に栄養が生きわたるの。だから鮭は子孫を反映し続けることができるんだ」

話の行方が未だ見えない。

「それは人間に還元すると、つまりどういうことになるの？」

由依ちゃんは深い呼吸と同時に顔を顎から上げた。空を見上げる鼻は彼女をより賢く見せる。

「簡単な話だよ。イメージしにくいかもしれないけれど、人間がもし死ぬようにプログラムされていなかったら、そこから中老年人だらけになる。ホームレスが駅にあふれるだけの話じゃなくなるんだ。そうすると社会的な制度は何も意味を為さなくなるし、物理的にも地球はパンクする。次第に生殖活動も行われなくなつて地球が劣化してしまう。だから人は死ぬように遺伝子によつてプログラムされているんだ。ラージD因子つていうのが、その死を操る因子だね。進化の過程でスモールd因子つていうのが生まれてしまったんだ」

今の話からラージD因子が死ぬためのプログラムだとすれば、その反対は明確である。

「スモールd因子はもしかして、死なないためのプログラム？」

「そう。もつと正確に言えば生き返りのプログラム。スモールr因子もスモールd因子もそれぞれ単体では発現しなくてね、不思議なことに^{どこかに}ラージ因子がある人、劣勢ホモ同士の組み合わせになった人間だけが分裂人間になつてしまうつていうのが、今解明されている情報よ」

由依ちゃんがそう言い切ると、私の耳元から無機質な声が聞こえてきた。

「なるほどな。全員聞こえたか？　つまり松浦遙二等兵は脱走兵つてことか。非常に残念だなあ。非常に残念だ。この無線は約二百海里の距離なら繋がるんですよ。二百海里は約三百七十キロメートル。池袋松島間

でギリギリ聞こえちゃうんですね」

聞き馴染みのあるあの人の声だ。

「川越さん……」

救急車の無線は切れていたが航空無線を切り忘れていたため、今の会話が青海豚全員に流れてしまったのだ。死ぬことに必死だったワタシも、未来に必死だった私も、無線の存在などすっかりと忘れていたのだ。

「由依ちゃん、ごめんなさい、こっちの無線……繋がりがありませんでした」

さすがの由依ちゃんも舌を嚙んで渋そうな顔でハンドルを握り続けた。

「恩を仇で返すとはまさにこのことかと思いましたが、D因子情報については初耳でした。恩を期待以上の恩で返してくれたという意味では、今青海豚に帰ってきてくれるのであれば脱走の罪はなかったことにしましょう。国に認められない病院と国、どちらにつくかはよく考えてくださいね」

私には他の誰にも備わっていない強みがある。それは死をもつて覚悟を決めるという強みである。

「どちらにつくか考えたうえで行動です。脱走兵は射殺でしょうか？ あなたの敵が増えますよ。これ以上話すことはありません」

そう言っただけ私は航空無線をオフにして、その場で発信機をへし折った。

「ごめんなさい。私の不注意が原因で情報を漏洩させてしまいました」

簡単に許される行為ではないことは分かっている。国も捨て、信頼すらも失った私には帰る場所がない。それは重々分かつているのだが、不思議と涙だけは出なかった。

「起きてしまったことは仕方がない。次を考えましょう」

由依ちゃんの言葉は良くも悪くも冷たく、由依ちゃんに言葉をせかされるまで口を開くことができなかった。

「さつき提案があるって言っていたわよね、冬華、それは何？」

「薬を、承認せざるを得ない状況を作る策戦です」

情けない声しか出なかった私に、由依ちゃんは声のトーンを合わせてくれた。

「詳しく聞かせて？」

私は運転席の方まで身を乗り出して口を開いた。

「ええ。今なぜ分裂に関する薬の承認が下りないか、それは分裂の実態が国民に知られていないからだと思うの。西学も政府も分裂の事を隠蔽し続けているから二組織間の戦いとして全部政府が丸め込んでしまっていると思うわ。そんな政府の唯一の弱みは国民。国民からの反感が高まればその政権はやがて潰れる。」

だとしたら、国民を味方につけるのが一番だと思うの」

今までで一番話を上手く纏めることができなかった。話だけ話した後、結局伝えたいことが伝わっていないんじゃないかという不安が私の頭の中をグルグルと巡る。

「ちよつと待って、分裂の話を国民にするっていうの？」

「いいえ、違うわ。ウイルスを撒くの」

「どいうこと？」

私は一旦深く息を吸い込んだ。

「もう一度、話を整理させてね。平成十四年に重症急性呼吸器症候群が流行ったことは覚えているよね？」

「勿論。全世界の人々が死に怯えていたわ」

「まさに、その心理を利用するの。死に直結する病が流行れば人々は薬やワクチンを欲しがる」

「そのワクチンを利用してスモールr因子とスモールd因子を封じ込められれば、自動的に国民が求めるってこと？」

医療の最先端を走る彼女は私の想像していた二倍のスピードで理解してくれた。

「そう。ウイルスが蔓延して経済がストップすることも国としてはいただけないはず。懸念点があるとす

れば、あんまり詳しくはないけど、後遺症かな」

「つまり？」

「因子を破壊することで後遺症が残ってしまったら、国民は黙っていないんじゃないかって」

由依ちゃんは運転しながら何度も何度も首を小刻みに縦に振った。

「でもそれなら大丈夫。スモールr因子をラージR因子に、スモールd因子をラージD因子に置き換えることで後遺症の発現は限りなく抑えられるはず。このやり方なら因子が欠落することもないからさ」

「どうということ？」

「對馬教授が名取理乃に吹き込んだr因子の話も全てが本当の話ではないんだ。今私たちが持っている薬はスモールr因子をラージR因子に置き換える点滴なんだ。冬華が捕らえられていた七年の間に新たな発見がいくつもあってね、二つの因子はオキシトシン、セロトニン、ドーパミン等の急激な上昇によって消滅してしまうことが判明したの。つまりね、七年前冬華の分裂体である複数の遥香たちがこの世から消滅したのは、これが原因。生死にかかわる染色体が消滅したことで人間というそのものの物質が崩壊したの。今回用意した薬はその反省を活かして因子を先に補う薬なんだ。血液検査でその人の型を調べてから必要な数の因子を注入する。例えば^{ラージDが一つ}rrdd型ならラージR二つとラージD一つ。^{劣勢ホモ同士}rrdd型ならラージR二つにラージ

D二つ。その後、うつ病の薬からアイデアを得て作った、セロトニンとオキシトシンを一時的に増加させる薬を注入する。あと目の光を浴びながら犬でも眺めてもらう」

「犬？ えっと、それは、冗談？」

「いや、本気。人によつては犬と触れ合うだけで結構な量のセロトニンが増加する人もいるからね。そうすれば全員大文字因子ホモ接合体の人間になれるというわけ。劣勢ホモ同士の人も死なせずに救えることができるのよ」

彼女の話は確かに理にかなっているが、一つだけ腑に落ちない点がある。

「ちよつとまつて、だとしたら私はなぜ七年前に消滅しなかったの？ 今までの話を整理すると、劣勢ホモ同士の人が分裂人間となつて、セロトニン等が一定の指数を超えたら分裂人間は消滅するんだよね？ だとしたら根源である私が今生きていることは、話してくれた内容と矛盾した出来事になるんじゃない？」
専門外の話をしていると不意に自信が失われていく。

「よくそこまで理解してるわね。確かに、本来なら冬華も死んでいるかもしれない。でも実際は死んでない。それはね、冬華が、本当は^{劣勢ホモ同士の}hib型じゃないからなんだ」

「なのに分裂体なの？」

そんなにも都合の良い設定ばかりが揃うのだろうか。そろそろ私も話についていけなくなりそうである。医学の話としても付いていくのがやつとであるが、それと同時に自分が何者なのかも分からなくなっている。つてしまう。

「ええ。幸運にも、冬華はもとも^{ラージが一つあった}ラージ型だったんだ。でもそのラージR因子は機能欠損していた。対立する形質を持つ因子は片方が欠損した場合、もう片方が機能を補うようになっていく。冬華の場合はラージR因子をスモールr因子が補っていたから、本来は分裂するはずがなかった人間なのに、分裂の素質を持ってしまった特例なんだ」

この事実は私にとっては嬉しくもあり辛くもある情報だった。欠損さえしていなければ、長い間苦しむことはなかったのかもしれない。そう思うとますます小文字因子に憎しみさえ感じ始めるようになり、政府に抗う覚悟を再度腹の底から決めることができたのだ。

「ありがとう。教えてくれて」

「うん」

「私は死ねないみたいね、スモール因子が消え去るまで」
由依ちゃんもこくと一回頷いた。

「ウイルスに関しては西学の病態研究棟のバイオセーフティーレベルがphysical containment 3 levelだから、協力を得られれば実現はできるかもしれない」

「自ら作ったウイルスに自ら作ったワクチン。これなら確実に上手くいく。政府機関は医療に一步も二歩も遅れているから、数日なら待てるよ」

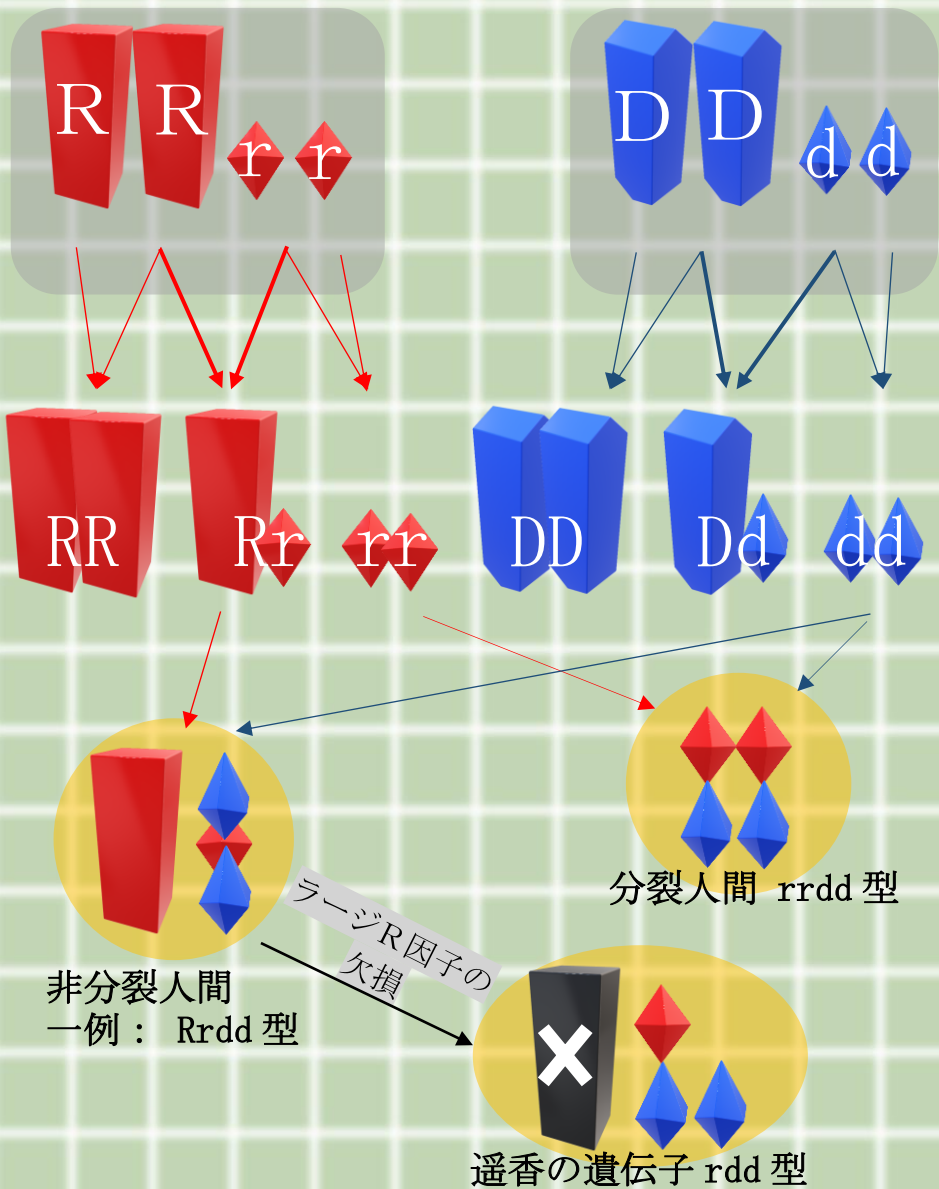
「でも数日も待つていたら捕まっちゃうんじゃない」

「いや、そんなことはない。私が基数を増やせることくらい、青海豚あっちも分かっているはずだから。西学の全精力を挙げて戦おう」

この救急車には過去の関係を清算した二人が乗っている。今の由依ちゃんと、今の私は同じ方向を向くことができたようだ。未来に向けて結束したのである。今は未来に繋がっている。

R 因子情報

D 因子情報



第八話　アオイ・イルカ

「全員「ヤ」を囲め。発砲は未だするな」

マサが東京にいる限り、ここでは俺が指揮をとらなければいけない。松島基地に到着した俺はいち早く地上に降り、分隊全員を集めて一機の戦闘機を取り囲んだ。

「松浦二等兵、手を挙げろ。これはどういふつもりなのか、すべて説明してもらいたい」

怒りや呆れよりも戸惑いを強く感じていた。

「構いません」

彼女はどのようなとした態度で、戦闘機の上から見下ろすように話し始めた。彼女は私が思っていたより賢い女である。

「私は確かに協力すると申しましたが、策戦がきちんと伝えられていないことに不満を感じております。

R策戦のことも、母さんがいたことも、何もかも知らされずに利用されました。その結果策戦の過程で違和感を覚え今回の行動をとりました」

彼女に対して俺はどう接していたら良かったのだろうか。下手に策戦を漏らしてしまったことは少なからず今回の脱走に繋がっている。

「どうやって、自殺を図ったんだ」

今この短い時間で彼女の思いを聞いても、その全てを理解することはできないだろう。分裂能力を持つ者の気持ちの方が分からないわけではない故に、彼女を責めることに対しては心のどこかに辛さを感じる。

「私が無線を使って質問した内容を覚えていますか？」

「なるほど」

一瞬の指示一つ聞き漏らさず自分の武器に変換してしまう彼女は人間として脅威である。

「そうです。アクロバット飛行のタイミングについてお聞きしました。一番Gがかかる旋回のタイミングでGスーツを緩め、一か八かで脳の血管に圧力をかけました」

素人にブラックアウトの知識があるとは、驚きである。

「私は川越正満さんが出した宿題の答えを見つけました。今ここに彼がいないことが非常に残念です。昨日の自分と今日の自分、そして明日の自分を繋ぐものが何か。それは記憶なのではないでしょうか。明日の朝、同じ場所で目が覚めたとして、今日の自分が昨日の自分であると思いついてる理由は、確かにそこで寝たという記憶があるからです。記憶があるからこそ今の自分は過去の自分と同じであると認識できる。先ほど生まれた私の記憶を引き継ぐ分裂体もまた、コピー人間なんかではなく、私そのものなのです。

「それで、松浦遙二等兵、君は今、何を望む」

足元に吹く風がスーツの裾と肝を冷やす。その風は一系列に並ぶ戦闘機のエンジンをも冷やしているだろう。

「西学の菓の承認です」

「同情するよ。だがそれはできない。第一、菓が承認されれば、あなたの生存すら保証はできない」

「それはご自身の生存の保証がないから怖いのではないですか。川越二郎空士長。あなたが川越正満さんと兄弟なんかではなく、本体と分裂の関係であることは子供が見ても分かります」

君のような勘のいいガキは嫌いではない。

「何を言うか」

「それも、川越正満三等空佐が分裂体で、川越二郎空士長が本体なんですよね。二郎だなんて、そんな安直な名前には引く掛かりませんよ。二人の共存の為に、たくさん動き回ってもリスクの少ない分裂体を主体と見せかけて、この分隊を動かしていたんですよね。あなたが分裂してしまったが故に、青海豚は必死で医学にしがみついた。解決を急ぐために私を独房から出したのでしょうか。ならば尚更、西学の研究を認めるべきです。あそこには私たちの知らない因子もある。もう一人の私からの無線を聞いたでしょう？」

まさか俺が本体であることまでお見通しとは、非常に驚きである。

「そうかもしれないが、こちらでも政府の顔や傘下の組織は守らなければならない。これは絶対なのだ。田中くん、彼女を軍機違反として拘束してください。お母さま、目の前でのご無礼をお赦しください」

俺は彼女の母親に敬礼をし、田中くんが彼女を別室へ移動させたことを見届けてから、今後の動きについての指示を出すことにした。もし俺が彼女の立場だったら俺は何をするだろう。薬の承認の為にどう動くだろう。

「さて、敵は西学にあり。我々政府が西学の薬をいつまでも承認しないとすると、遥のコピーのことだから、きつと無理矢理にでも薬を承認させざるを得ない状況を作り出すだろう。西学の弱点を余すことなくぶつけてくるとしたら、バイオテロか。ウイルスを意図的に散布することによって政治的かつ経済的なパニックを引き起こし、混乱に乗じて薬の承認を求めてくる、とかだろうか」

俺もその答えに自信があるわけではなかった。

「逃げたヤツを捕まえてしまう方が早いのでは？」

この状況を上手く呑み込めていないのは自分だけではないということが、今の田中くんの一言からも感じ取れる。普段はもっと冷静な彼も、今回ばかりは頭が回らないようである。

「いや、ヤツは今捉えても、何体の隠し玉を用意しているかが分からない。作戦遂行の為に今既に四五体く

らいまでには増えているかもしれないと考えている方が良いだろう。だから無駄なところにはあまり時間も人も割きたくはない」

俺がヤツならどうするか、ただそれだけをずっと考えている。混乱を拡大させるなら国内だけではなく、世界中にウイルスをバラまくはずである。世界から分裂人間を消滅させることを望んでいるとすれば……

「脱走兵は必ず数日中に国際線空港へ行く。田中亮輔准空尉と中島青空一等空曹は羽田空港へ、川村元彦空曹長と佐藤駿一等空曹は成田空港へ向かえ。私はR因子のみを頼りに、松国院の班員とワクチン化の準備を進める。いいか、空港で袋の鼠にするんだ」

西学の Bio Safety Level は確かヒースリーである。我々青海豚に因子の実態を知られた以上、のんびり病原体の開発は行えないはず。そうなると複雑なウイルスは製造できない。短期間で感染力の高い病原体を作るには、一から構造を考えるより既存のウイルスをバージョンアップさせる方が明らかに楽だ。

「松国院に告ぐ。脱走兵の捕獲までの間、インフルエンザウイルスワクチンの中にR因子情報を盛り込めるかどうかの研究をしたい。俺もすぐに顔を出すから、送った情報をもとに至急準備を始めてほしい」

「まさか、ウイルスの製造が僅か二日でできるなんて。さすが西学の精鋭部隊ね」

特に何一つ取り柄も強みもない私は棒立ちになっていたく感心していた。みんな同じくらいの年齢だというのに圧倒的な専門性の差を前にすると、この二十数年間を何も極めずにおめおめと生きてきたのは自分だけなのではないかと不安になってしまう。それだけではなく、どうにも取り返すことができない時間の差には少し後悔すらも感じている。

「一からの製造じゃないからね。ただの風邪菌の遺伝子をちよつと組み替えただけだから、そんなに時間はいかからなかったわ」

風邪の遺伝子という言葉自体が初耳である。

「風邪菌？ そんな弱い病原体で世界を脅かせることなんてできるの？　せめてインフルエンザくらいの強いヤツを応用した方が、なんていうか、強力なものができるんじゃないの？」

弱肉強食にのつとつたシンプルな疑問である。

「いや、今回の場合は風邪菌の方が良い。インフルは罹ると基本一日二日で発熱するわ。だから感染してもすぐに制圧できちゃうんです。でもただの風邪菌なら多くの場合は症状が表に出てこない。それはつまり、

この新型ウイルスに感染しても、人々はすぐに感染したことに気がつけないってこと。無自覚に保菌して不特定多数の人に接触、その数週間後にも症状が表に出るようになれば感染のスピードは拡大するし、人々はそれを恐れるようになる。今回のケースでは一過性より持続性の方が大切になると踏んでの策戦なんだ」

やはり彼女の知識は生半可なものではなかった。ここまでの展開を青海豚が予想しているかどうかは分からないが、最後まで気を抜くことは許されないだろう。

「なるほど。あとはこれさえばら撒ければ私たちの勝ちね」

「そうね。撒くならより多くの国の人が集まる場所の方がいい」

「……空港？」

床を見ながら人差し指の第二関節で唇を撫でながらそうボソツと呟くと、同じように視線を落としていた彼女も顔をあげて私に視線を送ってきた。どうやら考えていることはほとんど同じようである。

「そうね。私も空の玄関口が一番いいと思っているわ。でも多分、青海豚もある程度の警戒はしているはず。冬華の顔も割れているんですよ。下手したら街中のどこで監視されているか分からないね。警備は強化されていると思った方がいいかも。人目を盗んで空港に潜入する方法、ない？」

彼女は左手の中指で鼻の付け根を抑えどこか一点を見つめていた。彼女にとっての一番の懸念点はウイルスの製造ではなく、潜入方法であるようであつた。

「なくはないよ。私の顔は確かにバレてるって思った方がいいかもね。多分入口の警備員が一番目を光らせてると思うんだ。でも由依ちゃんの顔は青海豚にしか割れていないはず。つまり、由依ちゃんが潜入のタイミングで数少ない青海豚の連中に出くわさなければいいってことよ」

由依ちゃんはまだ少し腑に落ちない表情を見せていた。

「冬華はどうやって侵入するの？」

「ちゃんとアイデアはあるよ。木を隠すなら森の中。水を隠すなら川の中。じゃあ空港で隠れるなら、ね。」

＊

大勢の観光客の足音が響く。その中でも小さな子供の足音は特徴的である。タカタカタンタンと走ったかと思えば急にピタッと動きが止まる。そんな子供の可愛い足音を掻き消すようにキヤスターバッグを引きずる音が私を囲む。特にタイヤが点字ブロックに乗り上げた時の衝撃は顎にまで響く。

「よくそんな潜入方法思いついたわね。どういう生き方してたらそんなこと思いつくのよ」

「原始的でしょ？」

「なんていうかバカみたいな発想だけどね」

由依ちゃんの言葉は私をめぐけて一直線に飛んでくる。

「由依ちゃんも偶には面白い服装になれていいんじゃない？　いつも西学の制服でしょ」

「そうね。だけどこのバンドマンみたいな格好は、なんだかちよつと慣れなくて恥ずかしいわ」

「ごめんね。でもその方が、雰囲気があつていいとか、自然だから」

「そうね、まさか冬華がYAMAHAの楽器ケースに入るだなんて。やっぱり発想がぶっ飛んでるわ」

私は自分の膝を抱きかかえながら目をつぶって返事をする。

「それ褒めてる？　貶してる？　まあ、まさか人が中に入っているだなんて思わないでしょ。こっちは中から開けられないんだから、何があつても置いて行っちゃだめよ？」

「分かつてるって。窮屈なんじゃない？　しんどいでしょ」

由依ちゃんの声が平べったく聞こえるくらいには密閉度が高く、籠った場所である。

「ええ。出ていいことなら早く出たいわ。息のしにくさも問題だけど、段差に躓いたときとか結構ゴンゴン

振動が来るから痛いよね」

今までに閉じ込められたどの場所よりも居心地が悪い。

「丁寧さを心がけるわ。さ、そろそろターミナルビルに入るよ」

楽器ケースを転がす音が一旦緩み、さつきよりもゆっくりコロコロと進み始めた。

「様子はどう？」

「今のところいろんな人とすれ違っているけど、怪しまれてはいないわ。でも、ここからは会話禁止ね。私がノックしたら出る準備をして」

そう言われてノックがあつたのは潜入の十分後くらいだった。人気の少ない女子トイレ前のスペース。ケースから出てきて一番初めに目にしたのはツルつとニスの輝く薄黄色い床だった。時間はお昼の十二時半頃。帽子を深く被り、ウイルス詰めガラスの小瓶を片手に浦東行きのチェックインカウンターを目指した。

「じゃあまたいつか。上海で」

中国と日本を行き来するお客さんは季節を問わずかなり多い。一日何十万人もの旅客を抱えている空港が、何日間もたった一人の手配犯を探し続けることはできないというのは予想通りであつた。怪しまれること

もなく搭乗手続きを終えると、面白いくらいにすんなりとセキュリティチェックと出国審査を通過した。もう後戻りはできない。私の亡命策戦が始まったのだ。百十二番ゲート前で呼吸を整え、ボーディングブリッジに繋がるゲートにパスポートをかざしたとき、出国拒否のランプが光った。

「そこまでだ」

気づいたころには私は床にうつ伏せになって取り押さえられていた。両手を後ろに取られた今、必死に頭を上に向けると、目の前には中島さんが立っていた。待ち合い席の椅子の足の銀色のパイプ部分に目をやると、私を取り押さええている田中さんが微かに映っている。

「中島さん、田中さん、なぜ」

「最初にあなたの目的が分かったのは搭乗手続きの時です。パスポート番号で網を張っていたので、浦東行きのチケットが発券された時から追尾していました」

野次馬の騒めく環境の中、中島さんの矢のようにハッキリと飛んでくる声はクリアに聞こえた。

「なぜそこで捕まえなかったんです」

「航空券が発行されなければ、あなたはきつと怪しんでここから逃走するでしょう。その時に俺たちが君の近くについてかつ拘束できる可能性は極めて低い。袋の鼠って言葉をご存じです？ 保安検査場に足を踏

み入れてしまうと、そこから先、空港は一方通行なんですよ。まさにあなたは鼠となったわけです。そして、出国審査を終えたところでああなたの旅券を無効化させました。こうして確実に仕留めるためです」

田中さんの声は決してハッキリとした声ではないが、掴んだ私の腕と背中を通して骨を響かせた。もうすつかり声すら出せる状態にはなかったのだが、私の中の使命感はどこまでも私を足掻かせる。ズボンのお尻のポケットからウイルス入りの小瓶を取り出し、サツと地面に叩きつけようと試みた。しかし、鍛え上げられた青海豚の兵士を前に、そんな愚行は通じなかった。急に力が抜けてしまったのだ。

「ゾラ、多分サンプルの瓶だ。至急これを松国院に持って帰って」

「了解」

ウイルスは瓶から飛び散ることなく、青海豚の元へと渡ってしまった。

「私を、どうするつもりです？」

「拘束しかできません」

七年前の記憶の扉が開く。あの日も散々足掻いた後、青海豚に捕まった。今回もまた、私は数日間しか外の世界に居ることができなかった。今味わっているこの感覚は、あの日に感じた虚無感とは少し違う空虚感である。それは青海豚が未だ勝ったとは言い切れない状況だからである。

「なら、この勝負は引き分けですね」

目を閉じて、心の中でニヤリと笑った。

第九話 キミカ・ボクカ

彼女を一番弟子にしたことに後悔はなかった。論文用の実験における考察力も見事だが、有事の際の間違えない判断力や正確な情報伝達能力を兼ねそろえている。

「對馬教授。屋上にて訪問客がお待ちです。予定通り、動き始めましたね」
遂にに決着の時間が訪れたようである。

「ああ。そうみたいだな。五分後に行くと伝えてくれ。白衣とガスマスクを用意する。由依くんはここで待つてなさい」

「かしこまりました」

今日はブラックコーヒーを飲むというモーニングルーティンを邪魔されたせい、散歩に行きたがっている犬のように左心室がソワソワする。

「由依くん、身体にお変わりはないです？」

「ええ、今のところ大丈夫です。もう左腕も問題ありません」

「ならいい」

おまけに身体も丈夫である。私はファアから立ち上がると、敢えて白衣を羽織り、木製の引き出しから屋上

の鍵等を手に取ってゴソゴソと胸ポケットに入れ、ゆっくりと階段へと向かった。

「はじめまして、對馬教授。お話しできて光栄です」

屋上にはよく見慣れたドクターヘリが着陸している。そのヘリコプターの前では、少し肌寒い風が吹き続けており、男は銀座街のドアマンのように微動だにせず直立して待ち構えていた。

「はじめまして。お話するのは初めてですね。川越正満さん。私のドクターヘリも元気そうで何よりです」

ここでは街の音が一切聞こえない。こんなところで会談なんてしたことはなかったが、一対一のお話にはうってつけの場所かもしれない。

「失敬いたしました。そろそろご返却した方が良いかと思ひまして」

「どうも。こちらとしても、名取理乃をご返却したい。とんでもないことをしてくれましたな」

あちら側に居る名取理乃は一切笑った表情を見せず、スーツと冷たい空気を吸いながら私を見つめてきた。

「政府も必死なんです。今日は争うつもりはありません。お話をしたいと思ひお伺いしました。武器も何も所持しておりませんので、安心してください」

そういつて川越正満は来ていたスーツのジャケットを床に脱ぎ捨て、カッターシャツ一枚の姿になると、

手を挙げってゆつくりと一回転して見せた。

「ほう。それで、何のお話でしょう。西学病院の修理費でも賠償しに来てくれましたか」

「それはいずれ前向きに検討させていただきます。うちの佐藤が派手にやらかしてしまいました。ここまです悲惨なことをするつもりはありませんでしたので、先にそちらのお詫びをさせていただきます」

お詫びという言葉とともに、彼は軽く深めに頭を下げた。

「ところ對馬教授、どこまでが貴方の指揮する範囲の行動であったかは存じ上げませんが、私どもの遙二等兵がそちらでお世話になったと聞いております。空港での一件から十三日が経ちました。そちらで製造された細菌の詰まったカプセルは無事回収したはずですが、どうも彼女の様子がおかしいのです。これは一体どういうことでしょう」

ゆつくりとゆつくりと、本題へ話が移ろうとしている。

「そうですか。何も聞いていないんですね。彼女は既に密閉された狭い空間の中でウイルスに接触していたんですよ。万が一小瓶を取り上げられたとしてもこの策戦が成功するよう、自らが新型コロナウイルスの犠牲者第一号となり空港に潜ったんです。まるで特攻隊のように。彼女は今どこにいるんです？」

「そここのへりの中に他の隊員と一緒にいます」

特に何の感情が湧くわけでもなかったが、シンプルに深いため息が漏れ出た。

「だとしたら、そこはもうクラスターですね。集団感染ってやつです。あと数日も経たないうちに皆が苦しみますよ。それで、我が院には診療しに來られたんですか？ お宅には松国院っていうご立派な病院があるでしょうに」

なんと言おうが彼らは一ミリも表情を変えなかった。その姿はまるで軍人である。

「外来棟がこちらではないことは存じています。對馬さん、生物・細菌兵器を開発、所有してはいけないうつてことはご存じですよ。西学が行ったことは立派な國際條約違反だと思いますが」

「生物兵器禁止條約を守っている国があるでしょうか。どの国も暗黙の了解で必死に研究開発を進めていますよ」

他の人がいることを忘れてしまうくらい、私は彼一人に集中して話を続けた。

「でもどの国もそのウイルス兵器を気安く使ってはいない」

「今回ウイルスをばら撒いたのは西学の人間ではありません。青海豚軍の兵士です。青海豚軍の遙二等兵です。條約を堂々とやぶった組織はあなたたちです。気安く民間人を入団させるからそうなるんですよ。これからウイルスは世界各国に広がり、下手すれば死者もでることでしょう。この発端の事実をどう隠蔽す

るかはお任せしますが、西学を敵視した暁には、すべてを公表しますよ」

「随分大きく出ましたね」

建前と正義がぶつかっている。どちらが正しいかなど、誰が決めることもできない口論へと発展しているのである。

「新型コロナウイルス、甘く見ていらつしやるようで。良いんですか、うちの薬を承認しなくて。このまま放置しておけば世界中で死者がでる。無自覚感染が怖いところだ。いずれ飲食店は営業中止。空の窓口は開かなくなって、物資の供給も止まる。街のロックダウンが始まった頃には既に、中小企業は次々と傾き、国民の怒りの矛先は全て国に向く。このワクチンが承認されれば確かに松国院に益はない。ただしこれから起こりうる事態をいち早く収束する鍵を持つことはできる。この鍵、欲しくありませんか。全世界の見本となる、モデルワクチンですよ」

「ご提案はありがたいのですが、こちらをご覧ください。川越二郎空士長、頼む」

彼がそう言うと、ドクターヘリからアタッシュケースを大切そうに抱えた男性が降りてきた。川越正満と同じ顔をしている。

「青海豚傘下の松国院でもワクチンを製造いたしました。脱走兵から取り上げた西学のウイルス情報とR

因子情報を掛け合わせて似たようなものが出来上がったと思います。私たちのチームも伊達ではございませんので」

私はその自信満々な態度に無知に対する恐ろしさを実感した。

「D因子情報は含まれていないんですね」

「ええ、なくてもウイルスには有用です」

「そうですか。そのワクチン、分裂人間が打つと死ぬかもしれませんね」

「たとえそんなことがあるとしても、接種者数から考えれば少数でしょう。多少の死はつきものです。アナフィラキシーとして処理するしかないでしょう」

人の死を何だと心得ているのだろうか。

「分裂現象を語るうえで前提となる知識は、優勢ホモ接合体 **RRD型**は優勢として、劣勢ホモ接合体 **rrd型**は劣勢として完璧な存在である

ということ。私たちのワクチンには、どの配列の人も優勢ホモ接合体 **RRD型**に戻すための作用が含まれています。それ

劣勢ホモを含む大文字型

は**RRD型**や**rrd型**が不完全な配列であると見ているからです。ここまでの知識は持ちではないでしょう。

小文字

rと**d**の因子はそれぞれの大文字因子に大きく影響されています。たとえ劣勢ホモのdという **rrd**という生き返りのプログラム

が組まれていても、**R**因子が一つあるだけで**rrd**という生き返るプログラムは機能しなくなる。逆に

劣勢ホモの「という」

「Bという致命傷の回復プログラムが組まれていたとしても、D因子が一つあるだけで、その修復作用は働かず、死ぬというプログラムだけが強く働くようになる。すなわち、あなた方が作成されたR因子のみのワクチンを既に分裂人間として確立されているBDE型の人間に投与することによって、その人はBDE型人間となり、生き返りのプログラムを失う分、生き返ったという実態も消滅することが考えられるのではないのでしょうか」

彼らは意として何のリアクションもとらない分、話の内容が全て伝わっているかが不安になる。

「それは想像に過ぎない話ではないでしょうか。何かそれを証明するものでも？」

「ほう。それではご提案があります」

「なんでしょう」

「お互いに証明しましょうよ。川越正満さん。ヘリの中から彼女を連れてきてください」

「何をする気です」

「私は我が西京学院大学医学部が誇りをもって製造したこのモデルワクチンを、まず分裂した彼女、榊田遥香さんに投与しましょう。同じように川越二郎さん、今あなたが手に持っているその松国院のワクチンを川越正満さんに投与してください。条件は同じです。貴方も彼女も分裂人間ですよね」

青海豚の隊員が考え込んでいる間に流れた数十秒の沈黙の後、その静寂の波に応えるかのように川越正満がゆつくりと親指を上を立てた。川越二郎はその指に目をやるとそそくさと動いた。ケースを地べたにそつと置き、注射器を取り出し、組み立て、川越正満の横に立ち並んだ。恐れた様子は見せなかった。

「タイミングを合わせて投与しましょうか」

私は彼に呼びかけながら、胸元から注射器を取り出した。

「ええ、構いません」

川越正満も彼の周りを信じ切った様子で、その目に一切の恐怖心を宿していない。

「では行きますよ。せーの」

同じタイミングで別々のワクチンを打った男女二名。結果は誰の目から見ても明白であった。注射器が床にペチンと落ちて数センチ跳ねる音がする。屋上では川越正満だけが足元から消滅を始めたのだ。

「なぜだ。なぜだマサ。なぜ了承した」

それを見た川越二郎の焦った怒りの叫び声が虚しく大気に消えていく。

「サムズアップ。ギリシャではなくそくらえのハンドサインだ」

「お前ふざけんなよ。命を賭けたギャグなんて求めてねえ」

川越二郎の涙は落ちた注射器の周りを小雨の降り始めかのように濡らす。

「俺はこの先の未来に、命を賭けただけさ。俺が命を賭けて守りたかったのは自分の地位やプライドなんかじゃなくってね、ただ好きな人と好きなものを食べて、好きな時にぐっすり眠れる平和な世の中だということを思い出ただけだよ。俺がここで死ぬということは、俺が殺すはずだった命を俺が救ったということだ。じゃあな、川越正満、本体さん」

そういつて川越正満と名乗っていた分裂人間は完全に消滅してしまった。

「仲間が戦死しても目標の達成を第一とするのが軍隊精神でしょうか。我々医療に携わる者としては人の命を守ることが何よりの目標なんです。この違いは分かり合えないのかもしれませんが。二郎さん、いや、元川越正満さん、今あなたの目の前で大切な人が亡くなりました。これをどう受け止めますか。アナフィラキシーとして処理すれば、それで納得がいくでしょうか。国民は軍隊精神なんか持っていません。自身の身近な人が健康でいてくれるだけで、それでいいんです。天下り先との問題だとか、そんなのは国民にとつてはどうでもいいことなんですよ。今のあなた方は我が国の平和と独立、そして国民の生命と財産、権利を守るために活動しているって言えるんですかね。どうにも私には都合よくいい顔をして、甘い蜜だけを求めよ

うとしている風に見受けられます」

そこにはただただ冷たい風だけが流れた。

「ヘリに乗っている他の隊員たちも出てきなさい。名前は」

「田中亮輔准空尉であります」

「川村元彦空曹長であります」

「よろしい。少し待っていなさい」

胸ポケットに入れておいたPPS端末の履歴から由依くんに電話を繋げた。

「もしもし由依くん、五人分の病床と搬送員を用意してくれ。男性三名、女性二名だ。頼んだ」

振り返ると、そこには士気を失った男性陣がただただ風に吹かれて突っ立っている。

「田中准空尉。まだ本部にも人がいるんだろう。今後の動きを伝えなさい」

大将を失ったチームは非常に弱い。私がそう呼びかけると、田中准空尉は自身の端末をポケットから取り出して、すぐさま本部へ通信を始めた。

「聞こえるか。田中亮輔准空尉だ。誠に残念ながら、我が青海豚統括分隊長である川越正満三等空佐はたった今殉職された。佐藤一等空曹、西学のモデルワクチンを承認するように上に働きかけてくれ。松国院のもの

は破棄してくれて構わない。中島一等空曹、破壊した西学の建物の改修をお願いしたい」

彼は終始舌を噛みながら俯いている。

「田中准空尉。松国院の開發したワクチン、ウイルスへの有用性さえ確認できるのであれば、六十五歳以上の人に積極的に回しなさい。分裂人間 Hrb 型の寿命が六十五歳であることも既に分かっている。あとは君たちで判断しなさい」

「ありがとうございます」

まだこの問題は解決したわけではない。むしろこれからが永い永い勝負なのである。未だ出会ったことがないウイルスとの闘い、その終わりはいつ訪れるのだろうか。

「青海豚の諸君、今度は非道な行為のためではなく、国民が上を向いて歩けるように、空を飛びなさい」

人間との付き合い方を見つけるための、あとがき

青年期と呼ばれる12歳から18歳の発達課題は自我同一性の拡散である、と発達心理学者のエリクソンは提唱しました。ハルカ・ヘルカ1を執筆した時の私は二十二歳で、まさにこの時期、就職活動等を通してながら自分もアイデンティティを探していたのです。ハルカ・ヘルカ2の物語の構想は当時からあり、アイデンティティをテーマにすることも決めていましたが、自分が社会に出て働けば世界の見え方が変わるかもしれないと思い、「自分とは何者か」に対する答えが出るまで筆を少し寝かしていたのです。

私は確かに「一人の人間として、他人と区別されるための独自性や他ならぬ自分という確信」は持っていますが、それを未だ上手く言い表せずにいます。しかし最近、自己同一性は言語化できないことが当然なのではないかという答えに辿り着いたのです。

アイデンティティという便利な単語があるせいで、自分とは何かについて端的に表さなければいけないのではないかと思いついていましたが、「自分の正体」は生きた時間に比例して大きくなっていくことを踏まえれば、その全てを把握することは不可能であるという境地にたどり着くことができたのです。これはアイデンティティの追求を諦めることと紙一重であると考えています。膨大な経験の情報とその組み合わせの通りは無限であり、その全てを駆使して自分を知りえることなどできないのです。

友達付き合い一つをとって見ても、私たち人間は会っている人や立場、環境や間柄等によって自分のキャラクターが変化することはよくあります。意図的にペルソナを付け替えている場面もあるでしょう。友人Aと友人Bの接し方はそれぞれ全く一

緒ではありませんし、同じ友人Aとコミュニケーションをとる時でも、一対一で話すときと大勢を交えて話すときでは、自分の演じるキャラクターに違いが生じます。また、自分が所属している組織や団体によっても自分のキャラやコミュニケーションにおける立ち位置は変わってきます。学校ではこんな自分、予備校ではこんな自分、ゼミではこんな自分、職場ではこんな自分といったように、人間は他者との距離感を掴みながら「自分」を作っていきます。複数のキャラクターを演じていると、どれが本当の自分なのだろうかと思うかもしれません。作られたキャラクターは本当の自分ではないと思うかもしれませんが、しかし、それを演じている自分に焦点を当てると、ひっくり返って「全てが自分である」と言えるでしょう。つまり自分の中にはいくつもの自分がいて、そのどれもが自分である、ということになります。

本作品では分人主義という概念がテーマの一つになっていますが、それはまさに、「一人の人間が所有する複数の人格の集合体が人間である」という考え方なのです。死に直面した人間の中身（人や物事との関わり方）を変えて、再度社会に繰り出すという本質の部分はほとんど同じかもしれません。ハルカ・ヘルカ1での遥香は死ぬことによって心理的な問題を解決しようとしていましたが、今作の遥（遥香）は分人を入れ替えることで自分を保っており、レポートという理由以外では死を選んでいないのです。遥はまさに、自分という存在を様々な組織に（本能的に）分散させることで、自分と向き合いながら死のリスクを抑えることに成功していたのです。社会では対人関係がストレスの要因になりやすいと言われています。もし皆さんが、心のどこかで対人関係にストレスやフラストレーションを感じている場合は、自分の分散の仕方をもう一度見直してみてはいかがでしょうか。

さて、このハルカ・ヘルカ2で登場する松浦遥は、ハルカ・ヘルカ1での「本体の榊田遥香、姉の冬華」と呼ばれていた女

性であり、ハルカ・ヘルカ1で主人公となった遥香とは間反対の生き方をしています。父親に育てられたか母親に育てられたか、学校に行っていたか学校に行っていなかったか、目の前のことに一生懸命だったか目の前のことがなく色々考え事をして生きてきたか等、些細なバックグラウンドが物語を動かすカギになっていたかなと思います。つまり、その経験の積み重ねの記憶が、今の彼女たちのアイデンティティを構築したと言えるでしょう。

前回同様、今回も登場人物は全て身近な人をモチーフにしており、青海豚の隊員は全て職場の数少ない同期を起用しています。特に川越君はこの本が完成することを心待ちにしてくれていたようなので、私も高いサービスピース精神をもって、セクハラ度としようもない度を二倍増しにして表現しました。

人物描写というのは相変わらず難しいですが、今回の執筆全体を通して一番頭を悩ませた点は生物学的な設定についてです。ハルカ・ヘルカ1では、分裂や分裂体の消滅は謎の現象として扱いましたが、ハルカ・ヘルカ2は、それから七年が経過した世界が舞台となっています。少なからず分裂現象の解明は進んでいると考え、ストーリー内でその仕組みを言及することになりました。前作の慣性の法則といい今回のメンデルの法則といい、まさかこんな形で理科の授業が役に立つとは思っていませんでした。作中では「オキシトシン、セロトニン、ドーパミン等の急激な上昇で分裂体が消滅」という表現がありました、これらの物質が何かを簡単に言い表せば「幸せを感じるホルモン」です。ハルカ・ヘルカ1では幸せや生きがいを強く実感したときに分裂体が消滅するという設定があったと思いますが、より科学的に表現するとしたらこういうことなのか、と考えて新たに作り出した設定です。この設定に基づく、川越二郎（＝川越正満本体）は、分裂体を生み出して以降、強い幸せや生きがい等を感じていないことに気づけます。航空自衛隊の中で生きがいを感じながら活躍しているように見える彼ですが、

(自分本体の身を守るために) 分裂体である川越正満を組織のリーダーとしたことで、本体自身の尊厳(アイデンティティの三つの構成要素である独自性、一貫性、所属性のうち独自性)を失ってしまい、生きがいを多少感じただけでは消滅しない身体になった、という設定になっています。

因子については本編内でご理解いただけましたでしょうか。文章量を削った結果、少しわかりにくい表現となっていました。かもしれないので、再度ここで解説したいと思います。人間はそもそも RRD 型という遺伝子のみを持っていましたが、現代社会にもまれた結果、R 因子と D 因子が変化して、r 因子と d 因子が生まれました。この r 因子は回復力に貢献し d 因子は蘇る(分裂する)ための情報が刻まれています。r 因子と d 因子は基本セットで発動するのですが、大文字の R 因子、または D 因子が存在することで、その力は発揮できなくなります。その為、rrdd 型のみが分裂人間となるのです。ハルカ・ヘルカ 1 で冬華は生きがいを感じたことによってホルモンバランスが変化し、d 因子が大文字因子に変化しました。そのため既に生み出していた分裂体は「生み出された、生き還ったという実態」が消滅したことにより存在を消しました。一方本体の遥香(冬華)はもともと機能欠損した R 因子を持つ ORRD 型の人間でした。そのため d 因子から変化した D 因子は機能欠損している R 因子にくつつき、ORRD 型の人間と化し、消滅は免れたのです。最後の屋上のシーンで注射を摂取した遥(ハルカ・ヘルカ 1 という冬華の分裂体)と川越正満(ハルカ・ヘルカ 1 終了後に生み出された川越二郎と名乗る、川越正満本体の分裂体)はいずれも分裂体であり、所有する因子は HRRD 型です。ここで西字は r を R に、d を D に置き換える薬を投与したため、彼女は RRD 型の普通の人間になりました。一方、川越正満が摂取した注射は r を R に置き換えるだけの薬であり、RRRd へと型を変えてしまいました。大文字因子が強く働く性質を持つ遺伝子であり、R 因子(一般的な傷の修復力のプログラム)

の存在によりd因子（生き還りのプログラム）の存在が掻き消されてしまったため、生き返った実態を失い、消滅してしまつたのです。つまり、分裂人間を生存させておくための方法は、HbD型の遺伝子ををRBDもしくはRbDのどちらかに同時に置き換えること一択だったのです。

設定の話として、もう一つ「家」についてもほんの少しだけ触れたいと思います。今作に登場する遙は前作の遙香とは違い、自分の家を持っていません。これはアイデンティティが確立していないことを示唆しています。アイデンティティ形成にあたって、人は「私は〇〇な人間である」という拠点（Ⅱ家）を持ち、外界に行つてはその拠点に帰るという動作を繰り返し、アイデンティティを確立していきます。病院、独居房、青海豚総本部、西京学院大学と拠点を転々としている様子はまさに、心の中の拠点がないことを表しています。

さて、ハルカ・ヘルカ1のあとがきにて、「本作が完成するころには平穏な日々を取り戻すことができればいいな」と綴りましたが、未だ新型コロナウイルスは終息せず、それどころか、戦争が始まつてしまうという最悪な情勢です。この小説も、元の日常が戻ってきた頃に筆を走らせようかと思つていましたが、このソワソワする世の中に、一つでもエンターテイメントが増えるといいなと思ひ書き始めました。お楽しみいただけましたでしょうか。ストーリーの中では政府に対してものをいう場面もあったかとは思いますが、著者の見解ではなく、あくまでストーリー上の敵対するキャラクターの一つの思想だと捉えていただければ幸いです。

この本を手にとって読んでくださった経験が、あなたのアイデンティティの一部に組み込まれ、今後の生活のどこかに豊かさをもたらせることができると思います。今後ハルカ・ヘルカ3を執筆する予定は今のところありませんが、また何か個人

的に面白いと思う作品が思い浮かんだら筆を走らせたいと思います。最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

ハルカ・ヘルカ2

発行日 令四年三月十一日
著者 鳥居 大誠



人は七年という時間があれば、何ができるだろうか
ハルカ・ヘルカ 1 から約七年後の世界
分裂現象の謎が医学的に解明される

時に冬華、時に遥香と呼ばれ
アイデンティティを見失ってしまった彼女の
勇気を持ったその行動は
世界を救うのか、それとも滅ぼすのか
そんな彼女の数日間を、ゆったりと見守ってほしい

ハルカ・ヘルカ 2

ハルカ・ヘルカ 2 青海豚の攻防